

呉市制 120 周年開館 40 周年記念「呉の美術－激動の時代を越えて」展(令和4年度)図録 テーマ論文
呉の美術－戦前から終戦後にかけて－

目次

はじめに	…8 ページ
I 大正時代	
1 呉市内における美術動向	
(1) 呉奨美会と戦前の呉美術協会	
(2) 呉市内における洋画の展示	…9 ページ
2 広島県画壇、中央画壇における呉ゆかり作家の活動	
(1) 広島県美術展覧会以前 (2) 広島県美術展覧会(「県美展」) (3) 広島県美術展(県美展)以外の動向	
(4) 中央画壇での呉市関係者の活動	…10 ページ
3 大正時代の呉美術の概況(まとめ)	
II 昭和前期	
1 呉市内における美術動向	
1.ポベニエ会 (1)ポベニエ会の誕生 (2)ポベニエ会第三回展	…11 ページ
(3)ポベニエ会第三回展以降	…12 ページ
2.二級美術院 3.インデペンデント会、海港洋画家協会 4.互歩会	…13 ページ
5.呉独立美術研究会	…14 ページ
6.呉市小学校教員図画作品展 7.呉蒼原会	…15 ページ
8.個展、その他 (1)水船三洋 (2)朝井 清 (3)長田健雄	…16 ページ
(4)鞆谷繁夫 (5)鎌田兄弟洋画展 (6)空野洲絵人 (7)日本画	…17 ページ
(8)その他の呉美術点描	
2 広島県内での呉ゆかり作家の活動	…18 ページ
(1)広島県美術展(県美展)への出品状況 (2)広島県美術院、広島洋画協会への出品状況	
(3)芸州美術協会ほか	…19 ページ
3 中央での呉ゆかり作家の活動	
(1) 官展を中心とする出品状況	
(2) 官展以外の出品状況	…20 ページ
4 戦時に関連した動き	
1. 美術における戦時体制の始まり	
2. 呉海洋美術協会、呉市翼賛会文化部の結成など	…21 ページ
3. その後の戦時に関する動き	…22 ページ
5 昭和前期の呉美術の概況(まとめ)	…23 ページ
(1)ポベニエ会から互歩会、呉独立美術研究会へ (2)戦前呉の美術における教員の姿	
(3)その他の戦前の呉美術の諸相	
(4)戦時下の呉の美術家たち	…24 ページ
III 終戦後－戦火を越えて－	
1 芸南文化同人会	
2 呉美術協会の誕生	…26 ページ
おわりに	
脚注	…27 ページ

【凡例】

- 1 本稿は令和4年度に開催した「呉の美術－激動の時代を越えて－」展図録に掲載したテーマ論文である。校了後の印刷原稿をワード変換して発行後の修正を反映させたため、ページ進行に図録のそれと若干のずれがある。また、図録に掲載した論文中の挿絵はすべて省いている。本稿に記載している図版や資料の掲載ページは図録における掲載ページである。(ご関心の向きは図録を購入いただくと幸甚です。)
- 2 本稿中に引用した新聞の翻刻は筆者が行い、「必勝の決戦調盛り 呉海洋美術展覧会盛況」(『呉新聞』昭和18年5月28日)については呉市史編さんグループ・向井能成氏の助力を受けた。
- 3 新聞の翻刻にあたり、旧字体は原則として現在の常用字体に改め、日付等の漢数字をアラビア数字に適宜改めた。また、解読不能文字は□で表し、難読文字には□囲いを付した。句読点は読みやすさの観点から適宜、加筆・修正を行った。
- 4 参考文献は文末脚注に項目ごとにその都度付記した。

呉の美術 一戦前から終戦後にかけて一

宮本真希子

はじめに

本稿では大正期から終戦後にかけての呉市における美術の動向を概観する。呉市として対象にする地域は現在の呉市の市域であり、戦前のそれではない。

地方美術を研究するにあたり、課題となるのは中央美術における美術専門誌のような文献資料の少なさではないだろうか。しかし、呉市においては幸いにも呉市文化スポーツ部文化振興課市史編さんグループにおいて、貴重な戦前の新聞(澤原家寄託『呉新聞』『中国新聞』『芸備日日新聞』)が保管されており、主としてこれら三紙の紙面に掲載された美術関連の記事を繋ぎ合わせることで、戦前の呉市における美術事象を辿ろうと試みた。膨大な新聞記事の調査の道標となったのは、同グループ向井能成氏の調査研究による美術に関する記事を抜粋・編綴した資料『地方紙に見る戦前における呉市での美術活動』(平成 25(2013)年)を第一とし、元呉市立美術館長の倉橋清方氏による「呉美術協会の発足と大正～昭和戦前期の呉美術」(『呉美術協会創立 60 周年記念誌 美術くれ』呉美術協会／平成 18(2006)年)、『呉市史』第 4 卷(呉市史編纂委員会編／呉市役所／昭和 51(1976)年)、第 5 卷(昭和 62(1987)年)、第 6 卷(昭和 63(1988)年)及び第 7 卷(平成 5(1993)年)、並びに元広島市現代美術館学芸員の出原均氏の編著による「戦前における美術概観－洋画を中心に」『年譜』(『広島美術の系譜－戦後の作品を中心に－展図録』広島市現代美術館／平成 3(1991)年)等の先行研究である。これらの先行研究に対しては心より敬意と謝意を表するとともに、新たに開拓すべき文献や史実が未だ残されていること、また、本稿は呉の美術史研究の第一段階として事実の列記に留まり、社会的・美術史的考察が不十分であることを初めにお断りしておく。未熟を謝し、今後の調査研究の進展を祈念する次第である。

I 大正時代

我国において近代的美術振興体制が形成されたのは明治 40(1907)年における文部省美術展覧会の発足と見ることができるが、広島におけるそれは大正 5(1916)年 5 月の第 1 回広島県美術展覧会の開催に置くことができる。このころ、呉においても時流に呼応した動きが見られた。

1 呉市内における美術動向

(1) 呉奨美会と戦前の呉美術協会

大正 5 年 11 月 18 日の中国新聞に「呉奨美会」が「明 19 日午前 9 時より東境通 3 丁目の銀行倶楽部に於て詩書画和歌俳句彫刻家の会合をなし美術の研究奨励に相互の親交を完うせんがため発会式」を行う旨が報じられている¹。この会は「画家を以て組織され」その幹部は「小田宮華溪(1876-1930)、有田耕文、和田陵雨、野上圭齋、常光雪山(昭和 2 年第 12 回県展時には「広島市水主町 常光雪山画伯」と紹介されている²。)」であったという³。しかし翌大正 6 年 3 月 27 日の中国新聞には「呉尚(奨)美会」が

散会し、既述の同会幹部らが発起人となって「呉美術協会」を設立し、春秋二期に「呉美術展覧会」を開催しようと賛助員を募集している旨が報じられている⁴。そして大正 6 年 3 月 30 日付け中国新聞には奨美会に代わって呉美術協会が設立された旨が報じられ、「詩書画彫刻家相互の總研究奨励並びに親交を計る」など規定 16 条が逐条掲載された(資料集、p178 規定全文掲載)⁵。さらに翌 31 日の同紙には呉美術協会の 4 月中旬における発会式の予告とともに、「呉には這うした健全な会の組織」がなかった、「会を代表する小田宮華溪先生は、職を呉高等女学校に置き児童を教育する先生でもあり、信用決して少からざれば会計上の問題を惹起すが様な事はあるまい」と述べられ、奨美会が会計上の不祥事により散会に至り、心機一転して組織の刷新が行われたことが暗示されている⁶。そして同年 5 月 3 日付け中国新聞の記事「呉美術協会なる」に「発会式を来る 13 日午前 9 時より午後 4 時迄の間に於て呉市東本通 3 丁目正覚寺にて挙行する由なるが、当日は在呉画伯を筆頭とし詩、書家既に広島、厳島その他各地より諸大家を招聘し盛大なる席上揮毫会を催すことに決定せりと。猶同会に於ては此際基本財産を拵え近く呉美術展覧会の如き催をも為すべしと云う」と伝えられ、発会式当日は小田宮華溪が本会組織の趣旨を述べ、当日参会の詩書画家は四条派 8 名、南宗派 2 名、詩書 3 名、混合(四条派と南宗派の混合⁷、南北合法⁸の意と受け取れる)2 名で、その詳細は次のとおり報じられ⁹、初期の広島県美術展覧会で活躍した県内日本画家の面々が集っている。石井素堂(四条派)、中川廣嶺(四条派)、八木雲谷(四条派)、香川含章(四条派)、西川芳溪(四条派)、立川錦崖(詩書)、重松春陽(詩書)、野上圭齋*(四条派)、高橋冠岳(南宗派)、福島大舟*(南宗派)、立川栖雲*(四条派)、常光雪山*(四条派)、和田廣風(詩書)、有田耕文*(混合)、小田宮華溪*(混合)(*が呉美術協会関係者)。そして発会式当日夜に、会長に平松緑太郎、理事に小田宮華溪、有田耕文、福島大舟、立川栖雲、福島大舟、林露月、評議員に「在呉両新聞主筆及び中国新聞支局主任」等が選出された旨が報じられている¹⁰、その後はこの会に関する新聞報道が途絶え、消息は不詳となる。

これら「呉奨美会」「呉美術協会」は報道内容から四条派、南宗派、混合の日本画家や書家が中心となって組織されたもので、油彩画、水彩画など西洋美術分野への言及が全くない。おそらく西洋美術分野は含まれておらず、当地への西洋美術の浸透が未だ浅かったことが推測される。

このほかの呉市内の動きとして、大正 7 年に小田宮華溪と書家の齊藤湘南の下にアマチュアの書画愛好家が毎月第一日曜日に集う「日曜画会」が組織され¹¹、大正 10 年 1 月には呉羽衣会主催の日本画第 1 回展覧会が開催されたほか、仁方町出身の手島謹一郎(初め香石、素岳、のち呉東と号す。図版 p33)が南画の達人として名を馳せていた¹²。因みに、「故森琴石翁の高弟で当代南宗画の隠れたる大家として墨色筆意絶妙を極め京阪地方画壇界に名声を博している広島県賀茂郡仁方町(現・呉市仁方)素封家の出身手島呉東画伯」の個展が昭和 2 年 4 月 23 日に広島葉業倶楽部(広島市)で開催される旨が報じられている¹³。

(2) 呉市内における洋画の展示

呉市において西洋美術が実際に展覧されたのは大正 9(1920)年 10 月 1 日から 10 日まで山下呉服店階上にて開催された「赤鳥会」第 2 回展覧会であったようだ。大正 9 年 10 月 3 日付け芸備日日新聞「赤鳥会美展評(1)」には「文の字」のペンネームで「呉市に於て最初の試みである赤鳥会第二回美術展覧会は既報の如く山下呉服店階上に陳列し十月一日より一般観覧を許して居る。元来当地にてはかかる催しの皆無の為め一般人士の洋画趣味は甚だしく理解少なき此時にこうした展覧会の開催せらるる事は当地一般人士の趣味を向上せしむる上に多大の力となるものである」と述べられ、以後 10 月 6、7、8 日と 4 回にわたり作品評が連載され(中国新聞においても 10 月 5 日と 6 日の両日作品評掲載)、展覧会への関心の高さが推し測られる。呉市での第 2 回展覧では米山竹亭(利助とも、1885-1969、広島県師範学校教諭)、日比野勇次郎(1886-?)、後藤栄之進ほか 20 余名の作家が出品し、呉ゆかり作家については、前年 11 月に広島市(崇徳教社)で開催された同会第 1 回展に参考出品として南薫造(1883-1950)の《イタリーの農夫》が出陳されたほか¹⁴、第 2 回展で「森岡義城氏の『眠れる子供』は呉市から出ている分ではいい出来であるが(後略)」との記述がある。赤鳥会は画家・彫刻家の平岡寛之が代表を務める洋画家を中心とするグループで、第 1 回展で平岡ほか 2 名の裸体画が(広島)西警察署で取調を受けるなど物議を醸し¹⁵、この第 2 回をもって終了したようだ¹⁶。

2 広島県画壇、中央画壇における呉ゆかり作家の活動

次に、広島県画壇における呉ゆかり作家の活動状況を見てみよう。

(1) 広島県美術展覧会以前

広陵美術会は広島最古の洋画を中心とする美術団体で、師範学校等の美術教師が主体となり明治 30(1897)年前後に創設され、明治 36(1903)年秋の第 1 回展から大正 5 年に解散するまでの間に 9 回の展覧会を開催した¹⁷。大正 4(1915)年に広島市(千田町、元広島高等師範寄宿舎)で開催された広陵美術展覧会(4 月 25 日-5 月 5 日)は日本画と洋画(水彩画・油彩画)の部門からなり、石谷辰次郎(日本画家としては柑圃、1885-1942、広島高等師範学校教授)、米山利助ほか会員 20 名が 200 点近くを出品した。呉関係者では、南薫造(油彩画《小島》ほか 4 点)、小田宮華溪(日本画《安ト不安》)が出品している¹⁸。

また、ザボン画会は大正初年に新進青年洋画家により創設され、吉岡満助(1889-1945)、肥後本義夫らが同人で、写実的な作風を示す広陵美術会に対し、「色彩と気分新しい運動を起したい」と云う希望¹⁹から結成された。大正 3(1914)年に第 1(または 2)回展覧会が開催され、大正 4 年に開かれた同会第 3 回洋画展覧会(9 月 19 日-23 日、広島市商業会議所)には 70 余点が出品され、呉ゆかりでは南薫造が《霞ヶ浦》他 3 点を出品しているが、大正 5 年第 4 回展の後の記録が確認されていない²⁰。広陵美術会とザボン画会は広島県美術展の創設と入れ替わるように姿を消しており、その基礎となった展覧会と位置付けられている²¹。

(2) 広島県美術展覧会(「県美展」)

大正 5(1916)年における第 1 回広島県美術展覧会(広島県物産陳列館、5 月 15 日-30 日)は、その前年に開館した広島県物産陳列館(現・原爆ドーム)内に設置された広島県出品協会(産業全般の調整と振興を図り博覧会・共進会・品評会・展覧会の開催等を業務とした²²)が主催して開催された。初回は無審査・出品数無制限の未熟で未整備な展覧会であったが、500 点以上の作品が陳列されて 4 万人近い観覧者を呼び、新人の発掘や美術文化の普及の上で広島美術界にとって画期となった。そして、第 1 回展終了後、広島物産陳列館館長の呼びかけにより同年 12 月には県美展の主権者となる広島県美術協会が設立され、出品規程・監査制度等が次第に整備されていく。第 2 回展から鑑査が行われ、一人当たりの出品点数は 2 回展では 10 点以内、3 回展以降 5 点以内、6 回展以降 3 点以内に制限された²³。

県美展には旧広陵美術会、旧ザボン画会の会員ほか当時の広島美術界の主たる作家たちが出品した。大正時代において呉ゆかりの作家では、南薫造(洋画、大正 5-6 年第 1-2 回、大正 12 年第 8 回特別出品)、上田直次(1880-1953)(彫刻、大正 5-6 年第 1-2 回、大正 9-10 年第 5-6 回)、小田宮華溪(日本画、大正 5-9 年第 1-5 回、大正 12 年第 8 回、大正 15 年第 11 回委員出品)、常光雪山(日本画、大正 5-6 年第 1-2 回、大正 8 年第 4 回)、野上圭齋(日本画、大正 5 年第 1 回)、満村観音子(日本画、大正 5-11 年第 1-7 回、大正 14 年第 10 回)、高橋春草(日本画、大正 8 年第 4 回)、朝井清(1901-1968)(洋画、大正 14-15 年第 10-11 回)、宇根元警(1904-1999)(洋画、大正 15 年第 11 回)、堀内唯一(1893-1980)(洋画、大正 15 年第 11 回)らの出品が確認できる(必ずしも展覧会毎の出品・入選者全員が新聞報道されているわけではない²⁴)。なかでも小田宮華溪に師事した(ことから呉ゆかりと推定)満村観音子は第 1 回の入選時にわずか 13 歳で天才少女の名をほしいままにしたが、昭和期以降はその名が報じられることはなかった。

この県美展に対抗して、大正 15(1926)年 5 月 1 日に日本画部と洋画部からなる広島美術院が結成された。広島美術院結成に際して「アカデミーの因習」の「破壊」が宣言され、ここには県美展の委員が一人も含まれず、県美展の主権団体である広島美術協会の委員構成や組織の硬直化への反発が原因となったようだ。院の同人で呉関係者には朝井清がおり、広島出身で県外在住の作家も含まれ、また中央画壇に進出した作家を多く輩出した。昭和 7(1932)年の解散まで毎秋展覧会を開催し、春の県美展に拮抗する一大勢力であったようだ²⁵。なお、県美展は広島市で開催された後で呉市の山下呉服店(本通 7 丁目)などに巡回していたとのことである²⁶。

(3) 広島県美術展(県美展)以外の動向

上記以外の展覧会への出品状況については、白耀会に小田宮華溪が第 1 回展(大正 9 年、崇徳教社)に《崩れたる山》外 6 点及び第 2 回展(大正 10 年、同所)に《頂淑美》(図版 p67)外 1 点を出品している。白耀会は大正 9(1920)年に結成された洋画家と日本画家による集団で、西洋画も日本画(日本の絵画)と見做して両者を区別しないという立場に立ち、当時の広島美術界の重鎮、

石谷柑圃(辰次郎、広島高等師範教授)、原白山(広島高等師範教授)、林半嶺、小田宮華溪(広島県立呉第一高等女学校教諭)、加藤晴彬、米山竹亭(利助、広島県師範学校教諭)の六名が同人となり結成された²⁷。しかし、大正 11 年以降は新聞紙面に現れず、短命であったようだ。

大正 13(1924)年 8 月には広島県内教職員の図画教育の技能向上と振興を目指して石谷辰次郎と米山利助を中心としてイーゼル会が結成されたが、この会には呉市内教職員の参加も見える。大正 15 年 3 月 1 日から 7 日にかけて広島県商品陳列所(現・原爆ドーム)でイーゼル会が広島市の(教員)研究会と合同で「教員美展(教員美術展覧会)」を開催した折には、200 点近い作品が出陳され、呉市からは長田健雄(1901-1940)、宇根元警、鎌田功治(1902-1975)が参加した。長田について「長田氏の風景は明快なタッチ、温味のある作品です」(米山竹亭)、宇根元について「宇根元氏の作品の中ではなんとといってもパイプのあるゴッホ張りの『静物』が一番光っています」(米山竹亭)、「器用にまとめるんだ(中略)明快な色彩はこの画のとどころだ。氏のものとして良きものだった」(山路商二)と評されている。また、米山竹亭は「教壇に立って顎や口先で図画の教授をする時代はとうの昔に過ぎ去りました、教師自ら絵筆を揮う、お描きなさいと範を示す教授でなければ恐らく児童の図画の力は進むまいと思います」と、当時の自由画教育思想を背景として、児童の自発性を発揮させるための教師の素養の向上を目指すイーゼル会発足の趣旨を述べている。一方、山路商二(山路商、1903-1944、広島洋画の前衛を主導)はこの会の盛大な誕生を祝しつつ「自分は決してクラシカルなものやアカデミックを排斥するのではないが千篇一律に爺むさく、自然の表面ばかりをコツコツつかず、もっと自由に自分自身を意識して精進して戴きたい」と辛口のエールで結んでいる²⁸。

また、大正 15 年 10 月 27 日-11 月 3 日のガンス社第 1 回展(広島県商品陳列所、広島出身の東京美術学校卒業生・在校生が同人)には同人として水船三洋(1903-1945)が、客員として上田直次が出品している²⁹。

(4) 中央画壇での呉市関係者の活動

南薫造は明治 43(1910)年の第 4 回文展に《坐せる女》(図版 p34)を出品して 3 等賞を受賞し、次いで 2 等賞を 3 年間連続で受賞(そのうち第 6 回文展出品作は《六月の日》図版 p34-35)、さらにその 2 年後にも 2 等賞を受賞して翌年(大正 5(1916)年)には審査員に就任するなど突出した存在であり、大正時代において、官展(文展・帝展)、光風会展、日本水彩画会展にはほぼ例年出品するなど精力的な創作活動を展開している。南薫造と並んで官展での活躍が目立つのは彫刻家の上田直次で同様にほぼ例年入選している。大正末期になると、第 2 回(大正 10(1921)年)及び第 6 回(大正 14 年)中央美術展に日本画家・片岡京二(1899-1993、図版 p68、69、78)が、大正 15 年の槐樹社第 3 回展に日本画家・三好光志(1898-1977、寄稿:向井能成「知られざる画家 三好光志」p81-82)が入選している³⁰。

3 大正時代の呉美術の概況(まとめ)

大正時代前半期においては呉市内では西洋美術(油彩画・水

彩画)は普及しておらず、呉市の美術界は伝統的な日本画家により主導されていたが、流派を超えて研鑽と親睦を図ることを目的に美術団体が結成され、展覧会の開催が企図されるなど、近代的な動きが見られた。また、呉奨美会や呉美術協会の主要メンバーであった小田宮華溪は、日本画家ながら県内の指導的な洋画家と交流して活動するなど、進取の気風が感じられ、県美展に創立以来積極的に出品し、委員を務めるなど広島画壇で重きをなしていたことが伺われる。

西洋画の展覧会が呉市で開催されたのは大正 9(1920)年の赤鳥会が嚆矢と伝えられ、呉市関係者による西洋画の創作・出品活動が確認されるのは大正末期であり、大正 14 年第 10 回及び大正 15 年第 11 回県美展出品の朝井清、第 11 回県美展出品の宇根元警、大正 15 年イーゼル会主催教員美展出品の長田健雄、宇根元警、鎌田功治である。ちなみに大正 15 年第 11 回県美展に関して、同年 6 月 21 日付け中国新聞に掲載の「美展西洋画録 夏場所大見立」なるものでは西洋画入選者 37 人(出品人員 137 人中)³¹について、「東の方 横綱 鬨川愚呂手助(鬨光(1907-1946)、現在の北広島町出身、日本におけるシュルレアリスムの大成者)、張出大関 山路何萬絵(山路商)」以下、大関、関脇、小結と続き前頭 6 人中に「前頭(二枚目) 朝井藍染(朝井清)」と、「西の方 横綱 林豊顔衛(林喜久雄か)、張出大関 肥後本凡智絵(肥後本義夫)」以下同様に前頭 6 人中に「前頭(四枚目) 宇根元元警(宇根元警)」と位置付けられ、呉関係者が広島洋画壇において一定の評価を得、その一角を占めつつあることが窺われる。

大正時代には南薫造、上田直次が中央美術界で高い評価を受け、県美展などにも積極的に参加して広島美術界を牽引し、地元を拠点として活動する作家では小田宮華溪、朝井清の活動が目立っている。また、洋画の普及や地域美術の振興には主として教職にある者が開拓者としての役割を果たし、長田健雄、宇根元警らが頭角を現しつつあったことが読み取れる。

II 昭和前期

1 呉市内における美術動向

大正時代末期の呉に於ては洋画に関して、教員を中心とする作家の個人的活動が成果を挙げつつあり、赤春会、純蒼会、青桐会(朝井清らにより大正 14(1925)年 6 月に結成)³²等の洋画団体が胚胎したが短命に終わったと伝えられる。そうした中、昭和 2(1927)年 2 月、昭和の幕開けとともに「小澤(道雪)主計少佐、長田(健雄)、浅井(朝井清)、宇根元(警)」といったその後の呉画壇を牽引する人々によって洋画団体「春草会」が組織されたことは昭和前期の呉画壇を予見するようで象徴的である。同会は 2 月 19 日から 3 日間海工会(本通 7 丁目、旧山下呉服店、官業労働組合呉海工会売店、大正 13 年-昭和 5 年)で作品 60 点余りを展示して第一回作品展を開催した³³。

1. ポベニエ会

(1) ポベニエ会の誕生

本格的に呉洋画壇を隆盛と成熟へと導いたのは、「ポベニエ会

(呉ポベニエ会、ポベニエ会とも)」である。同会は「呉洋画研究所」(詳細不詳)を前身とし、文化活動に理解の深い青木実医師の仲介で海軍士官と呉市内小学校教員を主なメンバーとして、呉に在住またはゆかりのある画家により昭和3年8月頃発足し、事務所を境川通六丁目青木医院内に置いた³⁴。昭和4年1月19日から3日間海工会で第一回展を開催し、土谷力三郎、堀勝三、井上辰次、岩崎義信、亀崎頼一、中澤義信、岡崎文勲、小澤道雪、宇根元警、松浦武士による作品66点と番外として中央展で活躍する小林喜一郎(二科会、岡山県ゆかりの洋画家)と水船三洋(1903-1945、呉市出身の帝展作家)の3点が展示された³⁵。第2回展は同年10月5日から2日間呉銀行3階で開催され、前回から出品の土谷力三(郎)、堀勝三、中澤義信、岡崎文勲、小澤道雪、宇根元警のほか堀房子(国展)、石原唯一、川崎廣志、高岡夜須子、松浦武士、守安正、堀内唯一(1893-1980、春陽会)の名が新たに見え、77点の作品が展示された。本展に対してペンネーム「C生」は作品評のほか「一般にポベニエ会展覧会の醸す空気は前回も自由と澆刺、屈託のない心意気をもっていたが、今回はそうしたものの特色づけられるまでに進んできていた、勿論会員中二、三名を除いては未完成の人達だがそれだけに画な希望をつなぎ得る世界がみえ、画練によって得られる技巧の未熟の如きは純真な会員があまり気にしていない気持ちほうなづける。ただ絶えざる熱と感激、性急せぬ神経の鋭敏さで急がざる労力が望ましい気がする」と展覧会全体に対する感想を述べている³⁶。

ポベニエ会第3回展は昭和5(1930)年10月18日から3日間、呉銀行階上で開催されたが、昭和5年10月13日付け芸備日日新聞の記事「ポベニエ第三回展 18日から3日 呉銀行楼上で」において、ポベニエ会の活動趣旨が以下のとおり述べられている。これは同年9月27日付け同紙「呉の秋を飾る 洋画展覧会 来月中旬呉銀行楼上で『ポベニエ』の躍進ぶり」に掲載された宇根元警による「会に先だち」と同趣旨で、これを加筆修正してポベニエ会として公表したものと思われる。

「ポベニエ会は10月18、19、20日の三日間第三回洋画展を呉銀行楼上を借りて開くことにした。

ポベニエは生後約一年余の内容外観共に嬰兒である。独り歩きは困難な程全く幼稚である。成人していない事は今から成長し度いと云う希望を持って嬉しいことだ。

此のグループの中から明瞭なイズムを弁別することは不可能であろう。然し錯覚に依って何かを感じられるかも知れない。

個人的にローマンチズム、サンチマンタリズム、リアリズム、シュール、リアリズム等々を持って居てもそれは会の主張ではない。然しポベニエはそれ等の何でも承認する。

ポベニエは絵を描く者、描き度い者、好きな者等のアマルガムである。

会の輪郭は時と場所と温度に依って如何なる形態にでも伸縮自在である。空気と熱度に依って大小を異にし得る風船玉について承認する。

ポベニエは時にデパートであって気軽に通過することができる。夏の開け放たれた窓である。誰でも自由に出入し得るのだ。

絵を離れて座談会を催すことがある。その場合話題は絵の事になり易い傾向はあるが病気の話になったり昆虫類になったり文学になったりもして興味が深い。

私等は平常集って私等の作品等に対し自分等の思っている事等を言ってみる。或る時にはむしろ苛酷だと思える位までに。

私等は多くの場合お互に花束等を交換し合わない。大部分の時に鞭を交換し合う。お互に賛辞等を呈し合わないと云う事は私等を透明にする(こと)です。それは友等に対する礼節だろう。送(贈)るべき時で無い時に花束等を贈ることは私等を混濁せしめる。

ポベニエの展覧会は年二回は行い度い希望を持っている。然し展覧会は主なる目的では無く従属的行動である。平常言ったり考えたり描いたりしたもの陳列して一度に眺めて見るに過ぎない。そして一般の批評を受ける。その事は成長を助長する栄養分である部分を摂取する。

ここでクラスの如何を問わず何も彼も一緒に乗せた急行列車は一寸停車して次の行程の準備をする。その間売子の呼声や乗降客の雑音等を耳にする。乗客等の各々の行動、憂愁、歓喜のヴァゾジュ(宇根元警の原文では「ヴザーージュ」(visage の意か))の間を煙草を吸いながら散歩するのです。

ポベニエ会事務所は境川六丁目 青木医院内に置く。」
いずれの言葉の端々にも新しく誕生した絵画団体のみずみずしい高揚感と呉の洋画文化向上への気概がみなぎっている。

(2) ポベニエ会第三回展

第3回展には70点余りの出品があり、昭和5年10月19日、20日、21日付け芸備日日新聞「ポベニエ展画評」(上)(中)(下)にて前出の所信表明のとおりに出品作家は水船三洋から愛の鞭、忌憚のない批評を受けている。なお、この作品評には次のごとく括弧内に出品者の職業・画歴に関する付記があり、この会及び構成員の様々な出自を具体的に知ることができて興味深い。「石原唯一氏(山口銀行呉支店)、故 中澤義信氏(故 海軍大尉)、松浦武士氏(ポベニエ創立以来の会員)、宇根元警氏(教師)、岡崎文勲氏(海軍大尉)、金澤重治氏(帝展推薦、槐樹社同人)、中元忠男氏(呉防備隊傭人)、秋井義雄氏(呉工廠勤務)、保田政美氏(大正中学二年)、堀勝三氏(ポ会同人)、山下品蔵氏(国画会同人)、山下房子氏(国展人選右夫人)、堀内唯一氏(山口銀行広支店)、鎌田知治氏(1930年展入選)、小澤道雪氏(海軍主計少佐)」。水船三洋はこれら全員について講評しており、例えば、中澤義信について「この人の絵には何れも奥がありません。『南洋風景』を見ても空気の厚みが全然出せていません。前景のやしも中景の建物もズット向こうの空も全く同一平面上にあります。『ダリヤ』にしても花がバックにめり入込んでいる様です。」、松浦武士について「色の系統には面白味がありますが、いささか故意によごしたのが気になります。『汚れた』のならばワザワザ汚さないでもよくはないですが、色刷写真などの色をまねてか奇妙な色を好む人がありますが感心出来なと思います。『二十号』の床屋か何かをえがいた絵で構図に変化乏しく第一観察が欠けています。あれ丈けの仕事をするのにこんな広面が必要ですか、ハンドスケッチで結構ぢゃありませんまいか。」、堀勝三について「画因に乏しく絵に感興

がないと思います。只漠然と描き出して仕方なしに終りまで描いたという風が見えます。これでは折角の絵がちっとも有難くなくなり、まだまだ下手糞の人でも喜んで描いたものに随分面白いものが出来るものですが。」など厳しい批評を加える一方、山下品蔵(1899-1969)について「自分は『東京郊外』より『静物』が好きです。小品だがうるおいが有って画品の有るよい絵だと思います。花、壺等よくその質感が出ています。『みち子』も極めて小品ではあるが、お手軽でない重い強さがあります。こんなのをみると絵の強さが画面の広さによらないことがよく分かります。」、鎌田知治について「非常に勇敢な人らしい。恐ろしくキツイ絵だ。『水仙と鳩』『鍋の中の小魚』は比較的静かな態度で観照された絵の様だが何となく此の人の領域でないのではないかと考えます。やはり『さざえとかにの腹』『原書の1ページ』乃至把『蛙とかたつむりなどの居る庭』『女教員とかに』などが本領の様に考えます。私は『蛙とかたつむりなどの居る庭』が最も好きです。野趣の横溢した奔放で自由な世界を称えます。こんなのをみると貧乏臭い絵などは犬に食われてしまえという気がします。」などと専門家の視線から美点を取り上げて評価もしている。

水船三洋は最後に「以上おこがましいことを書きならべました。もともとあまり(気が)進まないのをポペニエ会の相談役青木先生から切に依頼されるので止むを得ず書き出したのですが、今更ながらいうに易く描き難いのをツクツク感じます。書き終えて、何だか脇の下につめたいものを覚える心地がします。実際こんなつまらないことをツベコベ並べ立てるより少しでも自分の勉強をすべきですから。終りに同人諸兄の御健闘を祈ると共に幾重にも暴言を謝して筆を置きます。」と結んでいる。

(3)ポペニエ会第四回展以降

第四回展覧会は昭和6(1931)年2月21日から25日まで山口銀行階上(呉市本通8丁目)で開催された。この回には中央画壇の帝展、二科、独立、春陽、国展等各団体から鈴木千久馬、古賀春江、清水登之、林俊衛、故岸田劉生を含む22名による30余点に、会員からの約40点、そして一般の出品希望者を加えてポペニエ会史上最も盛大に挙行されたようで、総入場者数は会期5日間で約3500人を数えた。中央大家の作品が「網羅的」に紹介されるのは中国地方では最初の試みであり、同人の作品が売れたのも初めてであったという(宇根元警《花》と小澤道雪《風景》の2点)。地元からの出品について作品評が4回にわたって新聞に掲載され、第1回を確認できないので正確に出品者を把握できないが残り3回の紙面に、堀内唯一、山澤(小澤か)道雪、鎌田友治(功治、1902-1975)、鎌田知路(知治、1907-1980)、神田周三(1894-1972)、長田健雄、仲元忠男、宇根元警、山下品蔵、松浦武士、秋井義雄、朝井清、佐伯久蔵、木田竹陽、水船三洋の名が記されている。会を総括して、宇根元警は、会員の努力による進歩を讃え乍ら、技巧にのみ走ることなく思想と思索により作品の内容を深める必要性を説き、相談役の青木實医師は会員の進歩と充実への賛辞と、さらなる精進への期待を述べている³⁷。

同会からは中央画壇への進出者を輩出し、この後も「地方画壇まれなる有力団体」³⁸と評されて、展覧会の開催が散見されるが、

昭和9年3月初め頃、ポペニエ会の父・青木實医師が他界し、本通り7丁目の渡部内科医院にポペニエ会事務局が引き継がれ、渡部医師も会員から信頼され慕われたことが窺い知れるが、その後、会としての活動は長くは続かなかったようだ³⁹。翌10年11月の第12回展以降は同会の消息を確認できない⁴⁰。なお、青木医師の七七忌に当たり昭和9年4月21日から三日間呉銀行階上で追悼展が営まれた。出品作品は故人による版画や石膏細工など20点、その収集に係る清水登之の作品4点、南薫造の作品4点、中村不折の作品2点、会員の近作17点などだった⁴¹。

また同会は、展覧会活動のほかには絵画文化を普及啓発するとともに活動の基金を積み立てるため、会員作品を自宅での鑑賞のためひと月50銭で貸し出す事業を行ったと報じられている⁴²。

ポペニエ会出品状況(第1~4回)

回次	第1回	第2回	第3回	第4回
会期(年/月/日)	S4/1/19-21	S4/10/5-6	S5/10/18-20	S6/2/21-25
出品者名/会場	海工会	呉銀行	呉銀行	山口銀行(呉)
朝井清(呉工廠)				○
秋井義雄(呉工廠)			○	○
石原唯一(山口銀行呉支店)		○	○	
岩崎義信	○			
井上辰次	○			
宇根元警(東本通小学校訓導)	○	○	○	○
岡崎文勲(海軍大尉)	○	○	○	
小澤道雪(海軍主計少佐)	○	○	○	○
鎌田巧治(岩方小学校訓導)				○
鎌田知治(八幡通小学校訓導)			○	○
亀崎頼一	○			
金澤重治(帝展、槐樹社)			○	
川崎廣志		○		
神田周三				○
木田竹陽				○
佐伯久蔵				○
高丘夜須子		○		
土谷力三郎	○	○		
中澤義信(海軍大尉)	○	○	○(故人)	
長田健雄(呉市立高女教諭)				○
仲元忠男(呉防備隊庸人)			○	○
堀勝三	○	○	○	
堀房子(国展)		○		
堀内唯一(山口銀行、春陽会)		○	○	○
松浦武士	○	○	○	○
守安正		○		
保田政美(大正中学2年)			○	
山下品蔵(国画会同人)			○	○
山下房子(国展、右(上記)夫人)		○		
水船三洋	○(番外)			○
小林喜一郎	○(番外)			
会員/出品者数	10(12)	13	15	15+x
備考(展示作品数)	66 番外3	77	70余	40 中央から 30余

※ 呉在住、呉ゆかりの画家が会員の条件となっているが、亀崎頼一はこの後、県美展等にしばしば出品しているが、呉でのその後の活動は確認できず、金澤重治(1887-1960)は鎌倉市ゆかりの画家で来呉・ポペニエ会参加の経緯は不詳で以後の呉に関連する活動は確認できない。神田周三(1894-1972)は広島市の画家で、ポペニエ会参加の経緯は不詳ながら後に芸南文化同人会に参加するなど呉にゆかりが深い(朝井清との交友関係を想定する説がある)。また、山下品蔵(1899-1969)も横浜市ゆかりの画家で来呉・ポペニエ会参加の経緯は不詳ながら、以後も互歩会や芸南文化同人会での活動が確認できる。

2. 二級美術院

賀茂郡広村(現・呉市広)では、大正15(1926)年11月27日-30日に大新開田口歯科医院で絵と写真による二級美術院第1回

作品展が手島呉東、矢口瑞枝、堀内美夢路(唯一)、石谷光舟、福富越山らによって開かれ⁴³、次いで昭和2(1927)年6月18日-19日に「会員の手になる和洋各画及び芸術写真を出陳」する「二級美術会」の展覧会の開催が報じられ⁴⁴、その後、昭和5年5月23日から3日間創立五周年記念の二級美術院第5回展覧会が広村公会堂で開催されている。日本画・洋画・版画・印画(写真)などのジャンルを含み、同人には池田栄廣(1901-1992、日本画、帝展)、堀内唯一(洋画、春陽会)、朝井清(版画、帝展)、石谷秀峰(写真、朝日新聞・中国新聞に入賞)らがいる。この第5回展では同人以外に広島・京都等から大家による参考出品を募り、加えて一般作品や児童作品を募集・審査して展示した。第一部として小学校児童の絵画を公募したところ900点の応募があり、「学校の図画」という観念を外して審査して入選60余点(50点、84点とも)、入賞15名・賞外佳作14点が選ばれ、当時鍋高等学校在学中の空野末人(1916-1993、のち空野洲絵人・八百蔵、作品名《みどりの国》又は《風景》)が受賞している。第二部日本画では池田栄廣のほか堂本印象、福田平八郎、中村不折、山田啓中(敬中か)ら、第三部洋画部では水戸範雄(帝展)、山下房子(国展)、堀内唯一(春陽会)、長田健雄(呉市女)、宇根元警(1930年展)、鎌田知治(1930年展)ら、第四部工芸部では加納哲斎(賀茂郡川尻町)の竹彫刻などの出品があった⁴⁵。その後も活動を続けていたようで、昭和12年6月12日から2日間開催された同院「趣味作品展」では「広村出身帝展作家(池田栄廣、市原稔、船田玉樹(日本美術院展の誤り)、朝井清)」による小品のほか、手島呂山(手島呉東の子息)、九十九寛策ら地元作家、地元アマチュア作家(県会議員、役場職員、医師、神官、銀行員、薬剤師など)30名が50点を出品した⁴⁶。

3. インデペンデント会、海港洋画家協会

昭和4(1929)年2月には呉市と広島市を中心に「孤立無援の洋画研究者」を自称する桑原直美、重田浩、藤田忠一、加藤論、美土路武夫、益川智明(呉海軍工廠砲煩工)*の六人が集まり「洋画インデペンデント会」が設立され、その第1回無所属洋画家展覧会がカフェブラジル3階(呉市)に於て同年3月16日から3日間開催された⁴⁷。本会に属する同人は各種の展覧会に入選するなど実績を持つ将来を嘱望された若手の洋画家たちで、その主張は「▽私たちは一定のシステムを持たない▽おもいついたときおもいついた形で描けばよいのです▽人々は好きな楽器を好きな形で好きなように鳴らしたり聞いたりすることでしょう、私たちは好きな楽器を好きなように描きます」と個性と自由を尊重するものであった⁴⁸。第2回展覧会は昭和5年6月14日から3日間中国会館(中国新聞呉支局3階)で開催され、出品作家は、浅田文男、加藤論、仲田美夫、益川知明*、佐渡久士、美土路武夫、穂田伏見、廣田稔、山路商、鬘光、山田一夫、檜山武夫(1906-1932、このときの出品作《プラットホーム》(関西展出品)は現在広島県立美術館所蔵の同名作品であろう)、野田武夫、鈴木千久馬、福井芳郎(1912-1974)、岡村利夫、桑原茂雄、佐竹久馬、藤川九郎*(1900-1991)、上野正子、伊藤タカで(*は呉在住作家)、前衛的な創作に取り組んだ広島県ゆかりの画家が参加しており、50点の

作品を展示した⁴⁹。新聞評では益川知明の作品《少女、楽器》《テーブル 魚と鳥籠》が新しい感覚と手法で異彩を放っていると高く評価されている⁵⁰。

昭和6年6月頃「海港洋画家協会」と名称を変更し、同年12月2日から3日間、呉山口銀行で第1回展覧会を開催している。出品者は、山路商、檜山武夫、益川知明(このとき22歳)*、吉野常吉、船田信夫*(玉樹)、藤田誠一であった⁵¹。なお、同年5月の第5回全関西西洋画展に船田、吉野、益川、檜山、山路が揃って入選している⁵²。第2回展覧会は翌昭和7年10月8日から2日間、呉中国会館で開催され、山路商、檜山武夫(このときの出品作《機関庫》(1931年二科展出品)は現在広島県立美術館所蔵の同名作品であろう)、藤田誠一、益川知明*、山邦邦夫(出品作中に《焼山風景》《二河風景》)、藤井茂男(出品作中に《呉越風景》)、幅水利之(出品作中に《二河風景》)、故桑原忠義、上野康彦で同人8名による50点が出品された⁵³。

なお、昭和5年11月「従来呉の美術界はなんらの統一なく研究家も、鑑賞愛好家もわづかに数人のグループにかたまって限られた芸術の呼吸をつづけられていたが今秋下旬から市内中等学校図画科担当教師の間より全市の美術発達の奨励と美術鑑賞向上普及を目的とする総合団体設立の計画が纏められたが機運早く熟して市内絵画研究団体ポペニエ、インデペンデント等も加入し26日午後7時からカフェブラジルで創立委員会を開催、結果は会名を呉美術院として例年5月展覧会を開催して呉市および付近町村の絵画愛好と研究者養成の権威ある機関たらしむるよう努力することに決定した、目下会員は30名、呉市では最初に統一された絵画団体のわけである⁵⁴」と報じられたが、続報を確認できない。

4. 互歩会

本会は、山下品蔵(1899-1969、当時国画会)がフランスから帰国してしばらく呉市に住んでいた頃、長田健雄、藤川九郎、中塩(幸造又は芳包)が山下に指導を請うたことを機縁に成立した団体と伝えられる。三人は山下から「真面目な写実を」と常日頃から諭され、「互歩会にとっていつまでも心の師であった」と長田健雄が回顧していることから⁵⁵、会の気風や作風が思い図られる。以後も「きわめてリヤルな作風と堅実な歩みとを特色として真面目な研究を続けている互歩会⁵⁶」「呉画壇の中堅団体として常に真面目な研究を続けている⁵⁷」団体などと紹介されている。会の結成は昭和7(1932)年で、呉市内の学校教員を中核とした水彩画中心(油彩・新日本画等を含む⁵⁸)の団体として設立された⁵⁹(長田健雄は生田正雄が名付け親と記憶していると述べている⁶⁰。他に長田国夫(1911-1994)が画家ゴッホの名前に因んで命名したとの説もあり⁶¹、同人宅には第1回互歩展のポスターが残されていた)。第1回展の記録を欠くが第2回展は昭和8年11月12日から2日間中国会館で開催され、山下品蔵、長田健雄らの特別出品を含め、40数点が展示された⁶²。第3回展以降の会期・会場、出品または同会同人の顔ぶれ、出品数は次表のとおり新聞報道により確認できる⁶³。

ちなみに日本水彩画会第23回展覧会(昭和11年1月25日

-2月1日、東京府美術館)には互歩会から長田健雄、村上静一、藤川九郎、生田正雄、林義勇の5名が入選したことが報じられ⁶⁴、日本水彩画会を初めとして中央展に入選者を続々と輩出し、第6回展(昭和12年)に寄せて長田健雄は、過去6年間で独立美術協会を除く、二科会、帝展、二部会、国画会、春陽会、白日会、日本水彩画会など中央の展覧会に良い人材を送り出し、地方文化に貢献したと総括している⁶⁵。さらに、第8回展(昭和14年)に際して長田健雄は8年間を振り返り、ほとんどの会員が第一回以来の顔触れで、展覧会の会期・会場もほぼ同様に続けてきたが、「ただ各会員の作品は例年通りのレベルとはいえないと思います、八ヶ年の間に、文展、二科展、一水会、二部会、国展、春陽会、光風会、白日会、日本水彩画会…と現在日本のほとんどの大展覧会に入選して、広島、東京の一部の人達がその存在をハッキリ認識するようになったのは実に愉快です、特に昨年(昭和13年)の林君の日本水彩画会受賞と本年の会員推挙とは大きな足跡といい得るでありましょう、互歩会の回顧展も必要ではないかという事もあります、すなわち第一回以来の出品作品と東都の大展覧会入選作品とを陳列してみるわけで、これもなかなか有意義なことでありますから近く開催したいとも思っています⁶⁶」と語っているが、これが翌年急逝する長田健雄の互歩会に対する最後のエールとなった。

互歩会への出品状況(第1回展は記録を欠く)

回次	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
開催年(昭和)／出品者	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
生田正雄		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小阪秀雄		○	○				○			○	○
佐伯朝一		○	○	○	○	○					
佐々木秀雄		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
中塩芳包		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
中塩幸蔵		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
仲田義雄		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
長田国夫		○	○	○	○	○		○	○	○	○
長田健雄	☆	○	○	○	○	○	○	★	★		
林義勇		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
藤川九郎		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
宮村久蔵		○	○		○	○	○	○	○	○	○
村上静一			○		○	○	○	○	○	○	○
山下品蔵	☆	☆?									
会員(出品者数)	不明	13?	12	10	12	12	12	10	10	11	11
出品点数	40余	48	50余	60余	30余	50余	48	56	50余	約30	31

※ 会場はいずれも中国会館(第10回展までは中国新聞呉支局3階、第11回展以後は呉新聞3階講堂と記されている。)

※ ☆は特別出品。★は遺作出品。

5. 呉独立美術研究会

ポベニエ会は昭和10(1935)年11月の第12回展覧会の後は活動が停滞したが、ポベニエ会の独立美術協会系画家によって、昭和11年の夏、「呉独立美術研究会」が結成された⁶⁷。以来、毎月熱心な研究活動が行われていたが、その成果は昭和12年3月に「本邦洋画壇の前衛として権威ある独立美術協会展」第7回展に5名の入選者(鎌田功治、鎌田知治、荒井不可志(1911-1987)、宇根元警、空野洲絵人(1916-1993))を出すという快挙に結実した⁶⁸。以下に呉独立美術研究会の活動と中央展(独立美術協会展)への入選状況等を辿る。

呉独立美術研究会第一回新作発表展が昭和12年5月28日から3日間、呉銀行階上(本通6丁目)で開かれた。その時の会員は、荒井不可志(第2、4、5、7回独立展入選)、鎌田功治(第4-7回以下同)、鎌田知治(第5-7回)、三王重志、空野洲絵人(第7回)、吉田務の6名で、独立展入選作を始めとして50号以上の大作を各自5点から10点展示したという⁶⁹。続いて、第2回新作小品展覧会(同年9月11-19日、福屋百貨店(呉市本通7丁目)、出品数25点)が開催され⁷⁰、第3回新作発表展覧会(昭和13年7月1-3日、呉銀行3階)では、会員による100号から小品に至る50余点を展示。同年3月の中央展(独立美術協会展)には荒井、鎌田(知治)、空野らの会員が連続入選しており、昭和8年以来連続入選の吉田宗一を新会員に迎えた⁷¹。第4回洋画新作小品展覧会(同昭和13年11月13-15日、呉福屋百貨店3階(呉市本通7丁目))では、出征中の鎌田功治の戦線風景2点が出陳され、本展終了後に呉海軍病院で「白衣の勇士慰問展覧会」を開催すると報じられている⁷²。第5回洋画新作展(昭和14年5月26-28日、呉銀行階上)では、中央展初入選の吉田務(アブストラクト派の鬼才)と木村成美を新会員に加えた⁷³。

因みに、第10回の中央展(独立美術協会展覧会、昭和15年3月)へは呉独立美術研究会から荒井(芸備銀行呉支店)、鎌田功治(岩方小学校)、鎌田知治(阿賀小学校)、空野(海軍軍需部)が入選を果たしているが、中国に出征・帰還した鎌田功治(兄)は「聖戦」の思い出を幻想的な写真で表現し、鎌田知治(弟)は、蓮沼に働く農夫と材木を切り出す山に取材して制作したが、時局柄画材の入手が困難で、精神的にも物質的にも打ちのめされたと語っている⁷⁴。

昭和15年には紀元2600年を記念して、中国新聞呉支社3階講堂で3月2日から2日間、呉独立美術研究会主催で「紀元2600年独立美術展覧会」が開催された。同展には、林武、高島達四郎、田中佐一郎、中山巖、松島一郎、兒島善三郎、小林和作、海老原喜之助、清水登之、鈴木保穂、鈴木亜夫ら中央の独立美術協会会員の秋季展出品作品をそのまま借り受け、呉在住の独立美術展の入選者の作品を合わせて40余点を展示した⁷⁵。続いて、同昭和15年11月10日から2日間、同会場で、再び「紀元2600年奉祝」と銘打って第6回洋画新作展を開催し、100号大の大作を始め30余点を展示した。鎌田知治は次のように語っている。「全国的に見て呉程独立展入選の多い地方はない。ただこの回から吉田宗一、空野洲絵人、三王重志、水本清、鎌田功治が絵画の研鑽等のため呉をはなれることになったため出品はない。新体制に報じ、日本人として恥かしくない独自の民族国家主義の文化体制を作りあげるべく努力を傾けている。(要約)⁷⁶」また、会員全般にわたり昨年(昭和14年)の新写実主義旋風をさらに掘り下げて画格が高まり、新鮮な空気が感じられると報じられた⁷⁷。

そして、翌昭和16年3月の中央展(独立美術協会第11回展)には呉独立美術研究会から木村成美(医学博士)、吉田務(広工廠)が初入選し、そのほか荒井、鎌田功治(前岩方小学校訓導、出征帰還後、青島に移住し商業に従事)、鎌田知治(阿賀尋常高等小学校)、空野洲絵人(東京在住)が「全勝的入選」を果たした。

前年より上京していた空野洲絵人は入選に際して次の様に述べている。「芸術は人間を造ることであり、そして人間は常に苦しむことである、苦痛と煩悶を押し切って常に生活を掘り下げていく、深い生活の中からのみ出たものが真の芸術であります、上京して半年あらゆる生活苦を体験いたしました、私にとっては東京の画生活は総べて路傍の石塊に舞落ちる一葉の木の葉にも大きな刺激と感激を覚えました、作品も5点出して頑張りました、良い作品ではないかもしれませんが、しかしこれが私の生活からしみ出た粉飾のない赤裸々な作品です。⁷⁸⁾

第7回洋画展覧会は、「県下洋画壇の最前線に君臨している呉独立美術研究会」と謳われて、昭和17年4月27日から3日間、呉新聞社3階で開催され、「鎌田知治氏のダイナミックな直截な感覚の動いている“収穫”、吉田務氏の重厚な“風景”、荒井不可志氏の(の)耽美冷徹な“海辺”、木村成美氏の清麗ユニック(ユニークか)な色彩を持つ“樹木”」など「帝都一流画壇の独立展に堂々入選の栄冠を克ち得た大作」を始め30余点が展示された。出品者にはこれら4名のほか藤田幸子の名前がある⁷⁹⁾。そして、昭和18年5月15日から三日間「県下洋画壇の最前線をゆく」呉独立美術研究会は呉新聞社3階で、最後となる第8回新作展を開催し、新会員(氏名掲載なし)の加入を得て約40点を展示した⁸⁰⁾。

呉独立美術研究会は県内初の独立美術協会系地方支部として創設され⁸¹⁾、その構成員は少数ながらほぼ全員が中央展(独立美術協会展)への連続的な入選を果たしており、レベルの高い活動内容であった。なお、呉独立美術研究会に関しては、向井能成氏(呉市文化スポーツ部文化振興課市史編さんグループ)による「戦前呉市における洋画団体の変遷と創作動向－呉独立美術研究会とその周辺－」『藝術研究』第26号(広島芸術学会/2013年)に詳しい。

呉独立美術研究会への出品状況

回次	1	2	3	4	5	紀元 2600 年	6	7	8
開催年月 (昭和年/月)	12/5	12/9	13/7	13/11	14/5	15/3	15/11	17/4	18/5
荒井不可志	○	○	○	○	○	○	○	○	○
鎌田知治	○	○	●	●	○	○	○	○	○
鎌田知治	○	○	○	○	○	○	○	○	○
木村成美					○	○	○	○	○
空野洲絵人	○	○	○		○	○	○	○	○
三王重志	○	○	○		○	○	○	○	○
吉田宗一			◎		○	○	○	○	○
吉田務	○				◎	○	○	○	○
水本清						○	○	○	○
藤田幸子								○	
会 員/出 品 者 数	6	5	7	不詳	7	9	4	5	4+x
出品点数	各自 5～ 10点 50号 以上	約 25 点	50 余点 100号 ～ 小品	不詳	45 点 (37 点と も)	中央 展作 品と 呉在 住入 選作 40余 点	30 余点 100 号ほ か	30 余点	約 40 点

※ 会場:第1.3.5回は呉銀行、第2.4回は呉福屋百貨店、紀元2600年及び第6.7.8回は中国会館(呉新聞社・中国新聞社呉支局)

※ ●は出征中出品、◎は新会員

6.呉市小学校教員図画作品展

呉市小学校の図画教師及び絵画愛好家が学校における絵画教育の域を超えて、団結して日本画・洋画ともに研究・発表し、小学校教育の向上発展に加えて地方画壇に新風をもたらすべく、呉市小学校教員会研究修養部主催により呉市教員展を開催することが決定され、昭和7年2月20日から2日間商工会議所会場において第1回展を開催し、21名の教員が日本画・洋画・水彩画など83点の作品を出品した⁸²⁾。第2回(昭和8年2月11-12日、中国会館)では、第一部日本画、第二部洋画、第三部工作図、第四部工芸の分野に分けられ、60余名が150余点を出品し、玄人裸足の出来ばえで、年中行事の一つとして呉市民から多大な期待を集めたと報じられている⁸³⁾。その後、第3回(昭和11年4月4-5日、中国会館)⁸⁴⁾、第5回(昭和12年3月6-7日、中国会館)⁸⁵⁾、第6回展(昭和13年2月26-27日、岩方小学校)⁸⁶⁾、第7回展(昭和14年3月4-5日、五番町小学校講堂)⁸⁷⁾の開催が確認でき、出品作家には、鎌田功治(岩方)、鎌田知治(阿賀)、後藤良亮(男子高)、佐々木秀雄(五番町)、中塩芳包(岩方)、中塩幸造(港町)、林義勇(両城)、藤川九郎(辰川)、宮村久蔵(長迫)らの名前が見える(()内は所属小学校名)。

このほか、学校教育関係者による展覧会については次のような記録がある。昭和13年11月19日から5日間、呉市五番町小学校講堂で日本図画手工芸会広島県支部展覧会が開催され、広島県中学校教職員で同支部会員の日本画、水彩画、油彩画、手工芸など51点が展示され、中央画壇大家の作品40点や長田健雄、内山市郎(1903-1972、当時広島師範学校教諭)らの作品も賛助出品された⁸⁸⁾。また、昭和14年3月12日から4日間、呉福屋百貨店3階で第1回呉市小学校教育研究会手工芸作品展覧会が開催され、後藤良亮(男子高)ほか市内教員が染焼・木工・石膏・竹工・紙工・粘土・手芸・木彫など70点を出品した⁸⁹⁾。

7.呉蒼原会

蒼原会は、日本水彩画会の中に中西利雄らによって大正11(1922)年に結成された東京三脚会を前身とし、大正13年に蒼原会と改称された。従来のイギリスに由来する自然主義的な透明水彩から、フランスに学んだ不透明水彩を用いたフォービズム調の水彩画の導入など新しい流れを作り出し、また、地方への普及を積極的に行った。昭和5年に蒼原会の国内2番目の支部として尾道支部が、続いて昭和7年には広島支部と呉支部が設立され、「尾道・広島・呉の三地方水彩群は、多士済々、現在、絶対日本一の水彩勢力である。恐らく、現(昭和12年当時)日本水彩の都市対抗では、優勝広島の名をほしいままに出来るだろう」と評された⁹⁰⁾。昭和16年2月の第二回呉蒼原会洋画展に際して、佐々木秀雄は呉蒼原会について次のように語っている。「呉蒼原会の出来たのはおよそ十年前のことでありまして、その当時は実に幼稚なもので、昨春急逝せられた呉市女の長田健雄先生が先達となり御世話をしておられ、中央画壇の作品を取りよせては私共をいつも鞭撻して居られました、数年前呉市で図画の講習会が開かれたとき講習会員の中から再びこの蒼原会の話が出て、長田先生そのほか同好の方から私と藤川氏を幹部に推され、及ばずながらお

世話することになりました、同好の方は主として中等学校、小学校の先生方の中で水彩画を描かれる人々をもって組織されることになり、それに一般同好者の参加を得て急速度に発達し、一昨年六月末第一回展覧会を五番町校講堂で開催した次第です、その後、毎月写生会、および批評会を行い、新体制下にふさわしく真面目に研鑽を続けて来ました⁹¹⁾

本会への出品作家には、筏登(八幡通小・女子高小)、生田正雄(呉工廠)、井澤忠義(荒神小)、碓井登一(呉一中)、畝田谷輝男(東本通小)、熊佐克彦、小泉茂賢(宮原小)、小倉義光(呉市女)、佐々木秀雄(五番町小)、四重田要(港町小)、諏訪浩三(女子高小)、瀧川満三(女子高小)、鞆谷繁夫(1913-1977、広中央小)、中塩芳包(岩方小)、中塩幸造(東高小)、長田健雄(呉市女)、西村武雄(広中央小)、林義勇(両城小)、故檜和田茂(元二河小)、藤川九郎(辰川小)、淵野口也(広小)、宮村久蔵(長迫小)、村上静一(呉市女)、村上哲也、安田信一(呉一中)、柳井秀雄(荒神山小)、吉岡繁人(大国小)らがあり、第1回展(昭和14年6月24-25日)⁹²⁾、第2回展(昭和16年2月15-16日、中国新聞呉支社階上、18名60点)⁹³⁾、第3回展(昭和17年9月26-28日、呉新聞社3階講堂、50余点)⁹⁴⁾、第4回展(昭和18年10月9-11日、呉新聞社3階、33点)⁹⁵⁾の開催が確認される。

8. 個展、その他

ここまで、昭和前期呉市内の主要美術団体の流れを辿ってきたが、本項では個展やその他の美術活動の状況を概観する。

(1) 水船三洋(1903-1945)

水船三洋が東京美術学校卒業制作のために帰郷した機会をとらえ、昭和4(1929)年3月1日から三日間海工会(本通)本部3階で第9回帝展入選作《婦人座像》を含む30数点による個展が開催された⁹⁶⁾。日本画家・小田宮華溪は「同氏は呉市の生める美術界の麒麟児である、その清新の作品は必ずや一つ一つ見る人を魅するであろう、われらは自分自身を育てる上に於いて、またこの若き芸術家の門出を祝する点において、一度この個展を見られんことを、広く願うてやまない。」と推奨し⁹⁷⁾、また、ポベニエ会会員の小澤道雪(海軍主計少佐)と思われる人物が「小澤生」なるペンネームで、「一步一步と把握して進んで来たその態度を作品の上に見られることは後身の参考として特筆すべき事柄」であり「統一した生命の流れ」があり、「今回の水船氏個展の如きは呉市としてははじめて」であり、「洋画においては黎明期である呉市」にとって非常に意義があると論じている⁹⁸⁾。呉市としては初めての本格的な個展であったようだ。

(2) 朝井清(1901-1968)

昭和7(1932)年8月27日から2日間中国会館において「素描社版画展」が開催され、創作版画が紹介された。呉での初めての版画展と報道されている。素描社は版画家・旭正秀が大正15(1926)年に設立した展覧会・出版など版画の普及を行った東京に本部を置く団体(のちにデッサン社と改名)で、本展は石井鶴三、平塚運一など創作版画の代表的作家30名を網羅した内容で「新芸術の豪華版」と謳われ、ドーミエの新聞挿絵自刻版も展示された。二日目に開催された講習会では旭正秀、平川清蔵(1896-

1964、尾道市出身、昭和2年頃呉市に住んだ)が講師を務め、その申込先は朝井清(内神町276-1)、秦野稔雄(神田町6丁目5)となっている⁹⁹⁾。

続いて、翌昭和8年11月25日から2日間中国会館で朝井清の創作版画個人展が開催され、前川千帆、平塚運一など創作版画の第一人者の作品の出品もあり、65点の作品が紹介され¹⁰⁰⁾、11月25日の呉新聞には朝井清が「世界に誇るわれ等の芸術 版画展開催に際して」(資料集、p179-180)を寄稿し、創作版画運動を紹介している。

昭和11年5月には朝井清を中心に後藤良亮、中川博、大成茂、柿本民子、山村武子らをメンバーとする呉創作版画倶楽部が結成され、新興美術協会展に入選者を出すなど注目を集めた¹⁰¹⁾。新興美術協会展へは、荒木俊彦、中島勉、鹿島務が版画で、因みに宮首博が写真で入選していることが報じられている¹⁰²⁾。また、定期的に展覧会を開催していたようで、昭和14年6月に第2回展が開かれた記録がある¹⁰³⁾。

その後、朝井清は継続的に個展を開催していたようで、昭和17年11月22日から二日間、第5回個人展覧会を呉新聞社3階講堂で開催。朝井は帝展、国画展、東光会へ入選、また日本版画協会、新興美術協会そのほか広島県美(術協会)、呉海洋美術協会の会員と紹介され、新興美術協会展や日本版画協会展への出品・受賞作をはじめ近年の版画および油絵など総数50点が展示された¹⁰⁴⁾。

続いて、翌昭和18年11月21日から3日間、呉新聞社講堂で朝井清の第6回油絵版画展が開催され、出品作は近作40点(当該年の日本版画協会展、日本版画協会献納画展出品作を含む)で、応援出品として春陽会会員永瀬義郎、宮下貞之助、前田勝四郎ほか新興美術協会展出品者の作品も展示された。朝井について、日本版画奉公会、日本版画協会、新興美術協会および呉海洋美術協会の各会員で故伏見博英伯献上2点、御買上2点、帝展ほか各展覧会に入選回数とくに新興美術協会展では二千六百年賞を受賞したと紹介されている¹⁰⁵⁾。

(3) 長田健雄(1901-1940)

呉市立高等女学校教諭・長田健雄と尾道中学校教諭・杉原茂右衛門(太平洋画会に入選)の洋画二人展が昭和8(1933)年10月14日から2日間中国会館で開催された。展覧会に際して長田が二人の馴れ初めについて、10年前、上京した折(絵画研修のためと思われる)に知り合い、行動的な杉原に主導されて同宿して過ごし、石川寅治のアトリエを訪問したことなどを語っている。この夏久々に二人で日本アルプスにスケッチ旅行に赴き、「どうだ、一所にならべてみるか」ということになったという。この時の作品を中心に、長田は水彩、杉原は油彩を主として合計31点を展示し、長田の作品には初期作「三太とその相棒」(純蒼会に出品)「少女」(長田の文検時代)のほか「コタツ」(第19回日本水彩画展)も含まれた¹⁰⁶⁾。

呉画壇をパイオニアとして先導した長田健雄は昭和15(1940)年3月18日に急性盲腸炎(腹膜炎)により急逝した。享年39歳の若さであった。多くの人々がその早すぎる死を悼み、昭和15年

4月28日から2日間、遺作展が大坂毎日新聞呉支局及び中国新聞呉支局の共同後援により中国新聞呉支局3階で開催された。遺作展では未発表作を含む40数点が展示されたほか、遺作頒布会、記念出版などの記念事業が有志による実行委員会で開催されることが告知されている。実行委員は、生田正雄、秦野楠雄、林義勇、加藤菊三郎、柿本吉良、笠井明士、養祖登三郎、横路百々作、田口定男、高橋彰三、長田国夫、村上静一、山本武夫、藤本貫一、藤川九郎、荒谷鉄惣、朝井清、佐々木秀雄、清水源太郎であった¹⁰⁷。

なお、長田は、昭和9年から数年にわたり、年初の呉新聞等に前年の呉美術界を回顧し総括する記事を寄稿しており、同時代人による呉の美術史の記録として貴重である(資料集、p180-181)。

(4) 鞆谷繁夫(1913-1977)

昭和17(1942)年8月30日から3日間、呉新聞社3階で鞆谷繁夫の水彩画個人展が開催された。鞆谷は豊田郡木谷村の出身で呉市広中央小学校訓導を務めていたがこの前年上京し、日本美術学校に入学して油絵を学んでいた。美校展(日本美術学校内の展覧会か)で最高賞の報國賞、日本水彩画展で最高賞の三星賞を受賞したほか東光会、光風会、大潮会、太平洋画会、白日会等にも入選していると紹介されており、そうした成果約40点を故郷で披露した¹⁰⁸。

(5) 鎌田兄弟洋画展

鎌田功治(1902-1975)、鎌田知治(1907-1980)の兄弟洋画展が昭和12年3月13-14日に中国新聞呉支局3階中国会館で開催された。出品作品は、独立美術協会展への入選作を始めとして、両人が過去3年間に制作した作品の中から厳選した49点が出陳された¹⁰⁹。

(6) 空野洲絵人(1916-1993)

昭和18年5月1日から3日間、呉新聞社3階で空野洲絵人が「軍港都産業戦士の文化昂揚に」と第1回個人洋画展覧会を開催し、空野は独立美術協会に第7回から当年まで連続7回入選を果たしており、この時は、近作の百号2点、80号、50号各1点の大作をはじめ合計30点を展示した。同年の独立展入選作《十六羅漢》のほか、太平洋戦争に取材した《十二月八日の真珠湾》《空爆》《砲撃》《友軍援護射撃》などの戦争画も陳列され、5日には呉海軍病院を訪れ、今回出陳の作品を陳列して白衣勇士を慰問すると報じられている¹¹⁰。

(7) 日本画

矢田邊清芳は賀茂郡出身で花鳥山水人物画の大家で昭和15年現在京都早苗会会員と報じられているが¹¹¹、「在呉日本画壇の重鎮」「郷土画壇の第一人者」「軍港呉地方における日本画壇の雄」¹¹²などと報じられ、個展の開催が新聞紙面では昭和13年頃から確認できる。継続的に個展を開催していたようで、昭和16年11月28日から3日間、中国新聞呉支社3階楼上で開催された第10回作品展では、「出品点数は七十点近くの多きにのぼり、幽麗な筆致で描かれた山水、人物、花鳥、風景などいづれも同画伯独特の典雅な境地を見せており、一般同好観覧者多数詰めかけ、好評を博するものと期待されている」と紹介されている¹¹³。昭和17

年11月28日から呉新聞社3階で三日間開催された第11回展では「優雅な山水花鳥をはじめ景勝の風景などいづれも画伯独特の創意にみちた彩管の冴えをみせており「小乗の我執から大乘の没我へ」との示唆のもとに黙々と精進研鑽を傾けて製作した力作」約70点が展示された¹¹⁴。続いて昭和18年11月27日から3日間呉新聞社3階で第12回展が開催され風景・花鳥・人物など56点が出品され¹¹⁵、昭和19年11月21日から3日間、呉新聞本社で開催された作品展では60点が出陳された¹¹⁶。

「芸柱社」は近藤浩一路(1884-1962、山梨県出身、洋画から日本画に転向、戦前は院展に出品、水墨画に独自の境地を開いた)指導の下に三澤三千彦を中心に石谷柑圃、片田天玲、八木雲谷、山内雪溪らが参加して昭和7年2月に結成された日本画研究グループで¹¹⁷、広島洋画協会と同年に発足しており、合同展を開催するなど¹¹⁸、広島美術院解散後の広島における日本画・洋画の二大潮流であったようだ。昭和10年3月13日から5日間、呉新聞社楼上中国会館で開催された呉で初めての展覧会では、広島・呉両市の同人社友と中央画壇大家の作品が特別展示され、呉からは矢田邊清芳が《まどろみ》《鯉(大作)》などを出品している¹¹⁹。

また、昭和18年10月15日から3日間、呉新聞社3階で三好光志(1898-1977)の個人展覧会が開催された。「…雄渾な筆致に、豪壮な構図に洗練された色彩に、つねに独創的な盛り上がる情熱の意欲を見せて、しかも平常精魂を傾けて製作した力作ばかりで非常な好評を博している」と盛況が伝えられ、「画伯は呉海洋美術協会の客員で、氏の東京における近來の進出は目覚ましく、数年来海軍省の御用画家として令名噴々たるものあり、かつて二千六百年観艦式に供奉艦加古に陪艦の光榮に浴し、或は航空美術、海洋美術の無鑑査招待といい、本春は画材蔵島で新院賞を獲得して准同人として新人群のトップを切っているなど、歯切れのよい飛躍振りを示している、今回出品点数は二十一点であるが、作品の傾向については郷土出身帝大教授文学博士松本栄一氏が折紙をつけて将来を期待されているほど斬新と独創の意欲に燃えている」と紹介されている¹²⁰。なお、三好光志については向井能成氏(呉市文化スポーツ部文化振興課市史編さんグループ)による「日本画と洋画のはざまで-知られざる画家三好光志について-」『藝術研究』第28号(広島芸術学会/2015年)に詳しく、このたびその要約をp81-82に寄稿していただいた。

(8) その他の呉美術点描

呉市出身の帝展系画家・土本薫が妻ふみとの作品展を中国会館で昭和10年8月1日から3日間開催した折に、土本は展覧会によせて、第一次大戦後の美術動向や帝展改組に対する所感を述べるとともに50余点の新作を展覧すると意気ごみを語っている。同展発起人には望月圭介、澤原俊雄、松本勝太郎、水野甚次郎、佐々木高栄など政界の名士が名をつらねた¹²¹。

昭和14年2月11日から2日間、パムボ会第3回美術展覧会が中国新聞社階上で開催され、水彩・油彩・日本画など会員が勤労の傍ら制作した作品50点が展覧された¹²²。その後の記録では、昭和16年2月9日から3日間、同会の「第5回洋画展覧会」が

中国新聞社呉支社階上で開催され、「第 7 回水彩画会および本年第 18 回白日会へ入選した村上哲也氏をはじめ 22 氏」が 48 点を出品しており、同会の詳細は不明ながら、他団体と同様に有職の画家・絵画愛好家による団体だが、氏名から女性と推測される出品者が約半数の 10 名含まれることが、他の絵画団体(女性出品者はごく少数)と比較してこの会の特色であるように思われる¹²³。なお、昭和 17 年 3 月 21 日から二日間「第 6 回純進美術展」が呉新聞社 3 階で開催されているが村上哲也や羽田功(東光会出品)が中心で構成員も類似していることから、改名した同団体の可能性がある¹²⁴。

昭和 18 年 3 月 20 日から二日間、呉新聞社 3 階で村上哲也(呉市山手町在住)の第 2 回個人展覧会が開催され、村上は今まで日本水彩画展、白日会展、太平洋画会に入選している呉海洋美術協会(呉蒼原会・パム協会)の新進画家と紹介され、クロッキー、水彩、洋画、版画など 40 点が展示された¹²⁵。

2 広島県内での呉ゆかり作家の活動

(1) 広島県美術展(県美展)への出品状況

回数	会期	呉ゆかり出品者
第 12 回	昭和 2 年 5 月 1 日-	日本画:常光雪山、洋画:朝井清、宇根元警、堀内唯一、南薫造(特別出品)
第 13 回	昭和 3 年 5 月 1-10 日	日本画:益井三重子、洋画:朝井清、生田正雄、宇根元警、堀内唯一、版画:朝井清
第 14 回 昭和 美展	昭和 4 年 4 月 25 日-5 月 15 日	日本画:池田栄廣、小田宮華溪(委員)、矢田邊清芳、洋画:朝井清、荒井不可志、生田正雄、鎌田知治、堀内唯一(推薦)、水船三洋(推薦)、南薫造(特別出品)、彫刻:上田直次(特別出品)
第 15 回	昭和 5 年 5 月 10-19 日	洋画:朝井清(委員)、生田正雄、鎌田知治、鎌田功治、版画:朝井清
第 16 回	昭和 6 年 5 月 1-10 日	洋画:朝井清(無鑑査)、鎌田功治、堀内唯一(推薦)
第 17 回	昭和 7 年 4 月 15-24 日	日本画:益井三重子、洋画:朝井清(委員)、堀内唯一(無鑑査)、益川智明
第 18 回	昭和 8 年 5 月 1-10 日	日本画:池田栄廣(委員)、洋画:朝井清(委員)、荒井街(推薦)、長田健雄(推薦)、藤井茂、堀内唯一(推薦)、益川智明、彫刻:浜谷西雲(宏雲)
第 20 回	昭和 9 年 4 月 28 日-5 月 7 日	日本画:益井三重子、洋画:朝井清(委員)、鞆谷繁夫、長田健雄(推薦)、堀内唯一(推薦)
第 21 回	昭和 10 年 4 月 28 日-5 月 7 日	日本画:池田栄廣(無鑑査)、益井三重子(協会賞)、矢田邊清芳、洋画:朝井清(無鑑査)、荒井街、鞆谷繁夫(協会賞)、堀勝三、堀内唯一
第 23 回	昭和 12 年 5 月 1-10 日	日本画:益井三重子、三好光志(無鑑査)、洋画:朝井清(委員)、岡部繁夫、鞆谷繁夫、堀勝三、堀内唯一(委員)、吉岡繁人
第 25 回	昭和 14 年 4 月 29 日-5 月 8 日	日本画:益井三重子、三好光志(委員)、洋画:朝井清(委員)、長田健雄(委員)、荒井不可志(推薦)、岡部繁夫(推薦)、鎌田知治(推薦)、鞆谷繁夫、堀勝三、吉田宗一(推薦)、版画:後藤良亮、大成茂、山村武子
紀元 2600 年 記念	昭和 15 年 4 月 28 日-5 月 7 日	洋画:堀勝三
第 29 回	昭和 18 年 5 月 1-10 日	朝井清(委員)、堀勝三、益井三重子

※1.主として出原均編「年譜」(『広島美術の系譜—戦後の作品を中心に—展図録』広島市現代美術館/1991年)に基づき作成。
2.会場はいずれも広島県商品陳列所(昭和 9 年から広島県産業奨励館に改称)。
3.昭和 11 年第 22 回展は内部紛争により二紀会(洋画)、日本画院(日本画)の多数が脱会して休会。その他記載のない回次は記録を欠く。
4.すべての入選者が新聞報道されているとは限らない。

昭和に入り、県美展は身近な登竜門として呉から次々と新たな

入選者を輩出し、呉美術のパイオニアである小田宮華溪、朝井清、長田健雄らは審査委員を務め、無鑑査や推薦に推挙される者もあり、呉画壇の成熟ぶりを物語っている。昭和 3 年第 13 回展には、版画部門が創設されて朝井清ら 2 名の出品が報じられ、昭和 14 年第 25 回展には版画部門に 5 名の入選者が報じられているが、その内 3 名は呉ゆかりであることが確認され、広島県唯一の版画における帝展作家である朝井が、呉を拠点に版画の普及に功績があったことが窺われる。

昭和 4 年の第 14 回県美展は広島市で開催された昭和産業博覧会の美術部門、「昭和美展(昭和美術展覧会)」として開催されたが、「地方の芸術的向上と発展」を志し、中央美術界から多くの特別出品を募るなどして盛大に開かれた。開催準備に携わった神田周三(1894-1972)は次のように気を吐いている。「この一月の厳寒の頃私は今度の特別出品勧誘のため上京して郷土の先輩南薫造先生におすがりして大家の作品全部で七十点余り、拝借することが出来た。快諾された諸大家は、約束よりも点数が増し、二科会、美術院、春陽会の大家も加わり、一大総合美術展の観あらしめる結果になった。都会ですら総合展は至難で、過去の美術界にはなかったのに、この点地方としては実に余りあるよるこびである。(中略)今まで開催された博覧会及共進会の美術展は、多額の金を費やしてもここまで至らなかったのに、広島における私たちの運動は、美術館なくまた金や背景にたよる事なく当然人間の持つ、まこと一つによって、この偉観を呈したことは、何よりも力強い画期的な勝利だと思う。広島人に呼びかける、この展覧会こそ、芸術家の運動の誇りだと思う¹²⁶」

(2) 広島美術院、広島洋画協会への出品状況

昭和 7(1932)年 10 月に広島美術院が解散し、洋画部のメンバーが中心となって 11 月 12 日に広島洋画協会が結成された。洋画部と日本画部の間の対立が原因と推測されている。創立会員(同人)は帝展系の神田周三、吉岡満助、吉岡一、大西秀吉、村上哲之、阪井谷松太郎、福井芳郎、内山市郎、大木茂、朝井清*、春陽会系の田中万吉、濱本仙、堀内唯一*、徳田哲郎、末川凡夫人、二科系の山路商、檜山武夫、石原唯一*、長田健雄*、独立系の辻清、荒井街(不可志)*、国画系の松下宗義で、会員は、前身の広島美術院が県外在住者を含めたのに対して地元在住で中央の団体展に入選した者に限られ、広島洋画壇の実力者の集まりだった(*は呉在住者)。第 1 回展(昭和 8 年 3 月)から第 4 回(昭和 10 年 9 月)まで開催され、呉ゆかり作家の出品状況は次のとおり確認される¹²⁷。

[広島美術院]

同院凡々社洋画展(昭和 2 年 7 月 9 日-13 日、中国新聞社)

:朝井清、堀内唯一

第 2 回展(昭和 2 年 11 月 1 日-7 日、広島商品陳列所)

:朝井清、南薫造(参考出品)

第 3 回展(昭和 3 年 10 月 31 日-11 月 6 日、広島県商品陳列所)

:朝井清

第 4 回展(昭和 4 年 11 月 1 日-7 日、広島県商品陳列所)

:出品作家詳細は不詳

第5回展(昭和5年11月10日-16日、広島県商品陳列所)
:朝井清(洋画同人)、池田栄廣(日本画同人)、南薫造(現代大家明治大正時代作品)

第6回展(昭和6年11月1日-7日、広島県商品陳列所)
:朝井清(洋画同人)、池田栄廣(日本画同人)
[広島洋画協会]

第1回(昭和8年3月15日-21日、広島県物産陳列館)
:朝井清、石原唯一、長田健雄、堀内唯一

第2回(同年10月23日-29日、広島県商品陳列館)
:朝井清、荒井街、長田健雄、堀内唯一、藤川九郎(公募)

第3回(昭和9年11月26日-12月2日、広島県産業奨励館)
:梶谷繁夫(入選)

第4回(昭和10年9月18日-24日、広島県産業奨励館)
:朝井清、鎌田功治、鎌田知治、堀内唯一、堀勝三(入選)

(3) 芸州美術協会ほか

昭和11(1936)年11月22日-26日に在京広島出身の美術家団体である「芸州美術協会」の第1回展が実現社の主催により広島県産業奨励館で開催され、呉から船田玉樹(1912-1991、日本画、院展等)が26点を出品したほか、鬚光(1907-1946、洋画、美術文化協会等)38点、中川為延(1904-1967、彫刻、官展)45点、野村守夫(1904-1979、洋画、二科会)45点、丸木位里(1901-1995、日本画、青龍社等)32点の作品が紹介された。実現社は広島の実業家・佐伯卓造が、経営する佐伯便利社に開設した文化事業を企画する部門であったようで、地域密着型の芸術情報誌『実現』(昭和7年3月2日第三種郵便物認可、月刊誌)を発行したことで知られる。翌昭和12年1月には中川為延、野村守夫が脱退し、呉から三好光志(1898-1977、日本画、青龍社等)が、その他柿手春三(1909-1993、洋画、美術文化協会等)、中谷ミユキ(1900-1977、洋画、官展)が加入した。

第2回展が昭和12年11月に予定されていたところ、時局に鑑み延期され、その代わりに昭和12年10月23日-24日に広島県産業奨励館で同社主催による「傷病兵士慰問献画展覧会」が開催され、呉関係者では船田玉樹、三好光志が出品し、広島の陸軍病院に20点、呉の海軍病院に10点が献納された。他の出品者には鬚光、丸木位里、柿手春三、中谷ミユキがいた。

その後、昭和13年12月に、同じく在京の広島出身美術家が構成員となる「広島芸術協会」が結成され、田中月観(会長、日本画、官展)、三好光志*(理事)、鬚光(理事)、丸木位里(理事)、水戸範雄(洋画、官展)、宇根元警*(1904-1999、洋画、独立美術協会)、圓鏝勝二(1905-2003、彫刻、官展)、池田栄廣*(1901-1992、日本画、官展/院展)、柴野利秋、島本隆司、岸田宏、中谷ミユキ、岡部繁夫*(1912-1969、洋画、独立美術協会)が参加した(*は呉関係者)。

さらに、昭和16年11月9日から4日間、翌昭和17年10月27日から4日間、広島市の福屋百貨店で「広島美術人協会」の第1及び2回展が開かれているが、この会は、「在京の広島県出身者の特選級新人」によって組織され、常安静人*、中谷ミユキ、宇根元警*、野村守夫、鬚光、中川為延、圓鏝勝二、三好光志*らが参

加している。第2回展では特に圓鏝による木彫「故有馬氏像」(第2回航空美術展出品)が話題を呼んだ¹²⁸。(※は呉ゆかりの作家)

これらの協会には共通する顔ぶれが参加しており、当時全国レベルで高く評価された広島出身の美術家が分野・イズム(主義)とも横断的に集い、美術家相互が高め合うと同時に郷土の人々にとっては多様な傾向の第一線の美術を鑑賞する機会となったようだ¹²⁹。

3 中央での呉ゆかり作家の活動

(1) 官展を中心とする出品状況

中央展では、南薫造が引き続き官展、日本水彩画会、光風会にほぼ毎回出品したほか、昭和5年第2回聖徳太子奉賛美術展、大札記念京都美術館展(昭和9年)、東京府美術館10周年記念現代総合美術展覧会(昭和10年)、個展(昭和10年4月1-7日、広島県産業奨励館)、第二部会(昭和10年、洋画小品展昭和11年)、明治・大正・昭和三聖代名作美術展覧会(昭和12年)、聖戦美術展(昭和14年第1回、昭和16年第2回)、海洋美術展(昭和15-17年第4回-6回)、満州国建国10周年慶祝絵画展(昭和17年)等に出品している。

上田直次も官展の常連であり、他に東京府美術館10周年記念現代総合美術展覧会(昭和10年)、第三部会(昭和10-13年第1-4回)に出品。

官展には新たに、池田栄廣(昭和2年第8回帝展、昭和5年第11回、昭和6年第12回、昭和8年第14回、昭和11年改組第1回帝展、昭和11年文展鑑査展)、片岡京二(昭和3年第9回帝展、昭和7年第13回)、水船三洋(昭和3-4年第9-10回帝展、昭和6-9年第12-15回、昭和11年文展鑑査展、昭和12年第1回新文展、昭和14年第3回、昭和15年紀元2600年奉祝美術展覧会、昭和16年第4回新文展、昭和19年戦時特別展)、名古屋謙一(昭和4-5年第10-11回帝展)、朝井清(昭和4年第10回帝展)、土本薫(昭和7-8年第13-14回帝展、昭和11年文展鑑査展、昭和13年第2回新文展)、市原稔(昭和11年文展鑑査展)、水船六洲(昭和11年文展鑑査展、昭和12-14年第1-3回新文展、昭和15年紀元2600年奉祝美術展覧会、昭和16-17年第4(特選)-5回新文展、昭和19年戦時特別展)、林義勇(昭和12年第1回新文展、昭和14年第3回)、長田国夫(昭和13年第2回新文展)、藤川九郎(昭和13年第2回新文展)、金子忠雄(昭和14年第3回新文展、昭和15年紀元2600年奉祝美術展覧会、昭和17年第5回新文展)、宇根元警(昭和15年紀元2600年奉祝美術展覧会)、常安静人(昭和15年紀元2600年奉祝美術展覧会)、梶田英一(昭和16年第4回新文展)、吉田宗一(昭和18年第6回新文展)が入選を果たしている。

(2) 官展以外の出品状況

作家名	出品状況
朝井 清	日本版画協会(昭和6-11年第1-5回、昭和13-19年第7(会員推挙、協会賞)-13回)、東光会(昭和8年第1回)、新興美術協会(昭和13年第7回(画人賞)、昭和14年第8回(特賞)、昭和15年第9回(2600年賞、会員)、昭和17年第11回、昭和19年第13回)
荒井 街(不可志)	独立美術協会(昭和7年第2回、昭和10年第5回、昭和9年第4回、昭和12-18年第7-13回)
荒木俊彦	新興美術協会(昭和17年第11回)
生田正雄	日本水彩画会(昭和9年第21回、昭和11年第23回、

生田正雄	昭和13年第25回、昭和16年第28回)、二科展(昭和10年第22回、昭和12年第24回)、国画会(昭和10年第10回)
池田栄廣	京都市美術展覧会(昭和9年大正記念京都美術館展、昭和10年第1回、昭和12年第2回、昭和14年第4回、昭和15年大毎奉祝日本画大展覧会、昭和16年第6回)、犬猫二十題展(昭和13年)、新美術人協会(昭和15年第3回)、日本美術院(昭和17-18年第29-30回展)
石原唯一	春陽会(昭和7年第10回)
宇根元警	日本美育協会(昭和3年第1回)、1930年協会(昭和5年第5回)、独立美術協会(昭和6-19年第1-14回、第10回で協会賞、第13回展で会友)、国民総力決戦美術展(昭和18年)、陸軍美術展(昭和18年)
岡部繁夫	独立美術協会(昭和13-18年第8-13回)
大成茂	日本版画協会(昭和13-14年第7-8回)、新興美術協会(昭和13年第7回)
小川 譲	独立美術協会(昭和10-13年第5-8回)
梶田英一	光風会(昭和16-17年第28-29回)
金子忠雄	第三部会(昭和11年第2回、昭和13年第4回)
鎌田功治	独立美術協会(昭和9-12年第4-7回、昭和15-17年第10-12回)
鎌田知治	1930年協会展(昭和5年第5回)、独立美術協会(昭和10-17年第5-12回)
木村成美	独立美術協会展(昭和16-17年第11-12回)
久賀玉雲	南画鑑賞会(昭和18年、会長賞)※昭和12年二級美術院に出品の久賀薬劑師と同一人物か
後藤良亮	新興美術協会(昭和13-14年第7-8回)
佐々木秀雄	日本水彩画会(昭和14年第26回、昭和15年紀元2600年奉祝第27回、昭和16年第28回)
四重田要	日本水彩画会(昭和16年第28回、昭和18年第30回(今年で3か年連続))
空野洲絵人	独立美術協会(昭和12-19年第7-14回)、国民総力決戦美術展(昭和18年)
田口正人	二科展(昭和8-10年第20-22回)、フランス「春のサロン」(昭和6年)
常安静人	独立美術協会(昭和8年第3回、昭和10-11年第5-6回、昭和13-19年第8-14回、第12回で会友)
鞆谷繁夫	光風会(昭和11年第23回)、白日会(昭和13-19年第15-21回、第16回でキング賞)、日本水彩画会(昭和10年第22回、昭和14年第26回)、東光会(昭和10年第3回、昭和12年第5回)、大潮会(昭和11年第1回)、太平洋画会(昭和12年第33回)
中塩幸造	日本水彩画会(昭和13-16年第25-28回)
中島 勉	新興美術協会(昭和17年第11回、版画)、現代美術展(昭和18年第5回)、新東亜美術協会(昭和18年第9回展)
長田健雄	日本水彩画会(昭和7-15年第19-27回、第20回で第一賞)、二科展(昭和7-8年第19-20回)、光風会(昭和9-11年第21-23回)、一水会(昭和12年第1回、昭和16年第5回(遺作))
長田国夫	光風会(昭和10年第22回)、春陽会(昭和10年第13回)
名古屋謙一	歷程美術協会(昭和14年第2回)
西村武雄	東光会(昭和13年第6回)
浜谷宏雲	第三部会(昭和13-14年第4-5回)
林 義勇	日本水彩画会(昭和11年第23回、昭和14年第26回、昭和13年第25回水彩画会賞受賞、昭和15-18年第27-30回)
藤井 茂	独立美術協会(昭和9年第4回)
藤川九郎	東光会(昭和10年第3回)、二科会(昭和10年第22回)、日本水彩画会(昭和11年第23回、昭和13-18年第25-30回)
船田玉樹	全関西展(昭和6年第5回)、日本美術院(昭和10年第19回試作展、昭和11年第23回、昭和15-17年第27-29回展)、新日本画研究会(昭和12年第3回展)、清尚(昭和13年第1回)、自由美術家協会(昭和13-15年第2-4回)、歷程美術協会(昭和13-14年第1-2回)、丸木位里・船田玉樹展(昭和14年)、航空美術展(昭和16年第1回)、大毎奉祝日本画大展覧会(昭和15年)、美の国推奨日本画展覧会(昭和15年)、研究会(昭和15-16年第1-2回、東京紀伊国屋画廊)、美術文化協会(昭和16年第2回)、岩橋英遠・丸木位里・船田玉樹三人展(昭和17年)
堀 勝三	日本水彩画会(昭和10年第22回、昭和12年第24回、昭和15年27回)、白日会(昭和14年第16回)
堀内唯一	春陽会(昭和3年第6回、昭和5年第8回、昭和8年第11回、昭和10年第13回)、白日会(昭和5-7年第7-9回)、新興美術協会(昭和10年第4回)、国画会(昭和15年第15回展)、新東亜美術協会(昭和18年第9回)

益川智明	全関西展(昭和6年第5回)
水船三洋	太平洋画会(昭和2年第23回)、白日会(昭和3年第5回)、行人社展(昭和7-10年第4-7回)、東光会(昭和8-10年第1-4回(会員推挙)、昭和13-14年第6-7回、昭和16-19年第9-12回)、個展(昭和11年6月資生堂画廊)、倉員辰雄・福原達郎・水船三洋・足立真太郎新作展(昭和12-13年第1-2回)
水船六洲	春陽会(昭和9年第12回)、新版画集団展(昭和7.8-11年第1.3-6回)、日本版画協会(昭和8-11年第3-5回)、童林社(昭和11年第4回)、国画会(昭和11-12年第11-12回国画会)、造型版画協会(昭和12-18年第1-7回)、陸軍美術展(昭和18-19年)、国民総力決戦美術展(昭和18年)
宮首 博	新興美術協会(昭和17年第11回、写真)
三好光志	1930年協会(昭和4-5年第4-5回)、槐樹社(大正15年第3回、昭和4-5年第6-7回)、二科会(昭和5-6年第17-18回)、独立美術協会展(昭和8年第3回)、青龍社(昭和9-12年第6-9回、昭和14年第11回、6回Y氏賞、8回社子推挙)、新興美術展(昭和15-18年第3-6回、第4・6回で第三賞、同人推挙)、大日本海洋美術(昭和17年第6回展)、航空美術展(昭和17-18年第2-3回)
村上静一	東光会(昭和10年第3回)、二部会(昭和10年第1回)、日本水彩画会(昭和11年第23回、昭和15年紀元2600年奉祝第27回)、光風会(昭和12年第24回)
村上哲也	新構造社展(昭和17年第16回)、現代美術展(昭和18年第5回)、新東亜美術協会(昭和18年第9回展)
森 成美	独立美術展(昭和16年第10(11)回展、初入選)※同年初入選の「木村成美」の誤植か
吉岡繁人	日本水彩画会(昭和13年第25回)、白日会(昭和13-14年第15-16回)、大潮会(昭和13年第3回)
吉田宗一	独立美術協会(昭和8年第3回、昭和10-19年第5-14回)
吉田 務	独立美術協会展(昭和16-19年第11-14回展)
吉田 穂	独立美術協会(昭和11年第6回展、昭和14年第9回)

※ 出原均編「年譜」、『広島美術の系譜—戦後の作品を中心に—展図録』広島市現代美術館／1991年、『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所編／平成18年3月)、本文執筆のために参照した新聞記事等を典拠に作成。
 ※ 表中の次の作家は地元美術界での活動は確認されないが、各右記の文献に呉ゆかりである旨が記載されている。
 小川譲(「独美入選発表 広島、呉画壇大収穫」『中国新聞』昭11年4月24日入選者中に「小川譲(呉)」)
 金子忠雄(「刻苦十年、文展第三部新入選 金子君留守宅の大喜び」『中国新聞』昭14年10月11日ほか)に呉市阿賀町出身で上田直次門下である旨)
 久賀玉雲(「南画鑑賞会で会長賞を獲得 仁方の久賀氏」『呉新聞』昭和18年2月26日)
 田口正人(「美術の秋～入選のおとづれ これも連続 呉一中出身 田口正人氏」『呉新聞』昭和8年9月1日)／「呉市が生んだ偉大な画伯 巴りの春のサロンで二点入選した田口正人氏」『呉新聞』昭和6年5月8日に、呉一中から京都高等工芸学校へ進学、パリ留学。帰郷後は土肥女学校、興文中学校で教職に就いた旨)
 常安静人(「常安画伯の誉れ 歎ぶ母校興文中学と同窓生 独立美展会友に推薦」『呉新聞』昭和16年3月16日に「常安静人氏は…呉興文中学校第1回の卒業生」)
 名古屋謙一(「大呉市民史 昭和篇 上巻」(呉日報社／1965年)p190に「呉市中通3丁目名古屋謙一」)
 藤井茂(「独立美術展入選 呉歌壇部の藤井茂氏」『呉新聞』昭和9年3月21日)
 森成美(「独立美展入選者発表」『中国新聞』昭和16年3月4日に「森成美(呉市藤本通14丁目416)」)
 吉田穂(「独美入選発表 広島、呉画壇大収穫」『中国新聞』昭11年4月24日入選者中に「吉田穂(呉)」)

4 戦時に関連した動き

これまでの記述に散見されるように、昭和前期の美術動向の時代背景には戦争への歩みがあり、本章では呉の美術における戦時に関連する動きを概観する。

1. 美術における戦時体制の始まり

昭和7(1932)年1月に発生した第一次上海事変で呉鎮守府など各鎮守府から派遣された上海陸戦隊で司令官を務めた植松練磨少将が、上海戦線で活躍した海軍将士を松田、安藤(安東収一)、清水(清水登之)、小川の四画家に百号油絵16点に絵画作品化させたものを持ち帰り、昭和7年6月17日午前9時から海軍下士官兵集会所桜松館にて海軍軍人を対象に公開し、翌18日午前9時から五番町小学校講堂で一般に公開した。画家たち

が戦火の跡を訪ね、戦況を従軍兵士に取材して描き上げたものだという。呉での公開は福岡、佐世保に続き 3 回目、東京での公開後、画家たちが更に筆を入れて完成させ、兵学校か三笠艦に保存される予定と報じられており、これらに相当する絵画 7 点が現在海上自衛隊第一術科学校教育参考館に保管されている¹³⁰ (図版 p82-p86)。この展覧会が、呉市での美術における戦時体制の始まりを告げ、その後、子ども達をも巻き込んで以下のような事象が続く。

- ・昭和 12 年 4 月、海軍人事部勤務の一等機関兵曹である横田 試郎が東京明治神宮外苑に建築中の海軍館から海軍生活の絵画化を依頼され、軍艦後部甲板における勅諭奉読の聖式を絵画化し、24 日に海軍館へ搬送された。横田は、技術は著名画家に及ばないが自らの体験は充分生かしたと語り、これが認められれば、続いて軍艦生活の絵を描くことになるかと語っている¹³¹。
- ・昭和 13 年 5 月 26 日から 2 日間、中国新聞呉支局 3 階講堂で「第 1 回海洋美術展覧会」が開催された。これは、海軍記念日を祝して海軍協会呉支部、有終会呉支局、呉市海軍郷軍連合分会が協同主催して開催したもので、市内小学校児童を対象として日本海海戦に因んで「わが無敵海軍の威容を遺憾なく描き出し」た作品を募集したもので、200 点を超える応募があり、優秀作品に対しては「聖将東郷元帥が、亘古の大海戦に座乗した軍艦三笠を模型とした颯爽とした軍艦色の文鎮」が贈られた¹³²。
- ・昭和 13 年 6 月 10 日から 2 日間、「海軍従軍画家実戦スケッチ展」が海軍協会呉支部、海軍有終会呉支部、中国新聞社呉支局の共同主催、呉鎮守府後援により中国会館(中国新聞呉支社 3 階)で開かれた。「出品画家は文展、二科展、独立美術展などの幹部ばかりで」「小早川(篤四郎)画伯《北四路わが陣地》、古島画伯《怒濤をついて》、三国(久)画伯《浦東の爆撃》《廃墟の関北》、高橋(亮)画伯《江湾時計台》、清水(登之)画伯《敵前上陸地点》、齊藤画伯《商務印書館》、住谷画伯《駆逐艦艦橋にて》、小林画伯《揚子江わが艦隊》、古城(江観)画伯《上海ガーデンブリッジ附近》」などが展覧された¹³³。
- ・昭和 14 年 11 月 17 日から 4 日間、中国新聞社呉支局 3 階講堂で呉海軍人事部、海軍協会呉支部等の後援で小早川篤四郎の海軍従軍画の展覧会が開催された¹³⁴。
- ・昭和 16 年 6 月 25 日から 20 日まで福屋百貨店 3 階(呉市本通 7 丁目)で広島県教育会主催の「傷痕軍人慰問の国民学校職員生徒図画作品展」が開催され、県下国民学校教職員児童制作の水彩画など約 100 点が陳列され、閉会后これら全作品は広島県賀茂郡「〇〇病院」に慰問作品として献納された¹³⁵。

2. 呉海洋美術協会、呉市翼賛会文化部の結成など

呉の美術界が本格的に軍事色を帯び始めるのは昭和 17 年からである。

昭和 17 年 5 月 14 日には「呉海洋美術協会」が結成されることが次のように報じられている。

「かねてから呉市在住の美術家たちを打って一丸とする強力な美術団体を組織して、軍港都の美術団体らしく美術品を通じて海

洋思想の普及につとめ、大東亜戦争における帝国海軍の大戦果に対する感謝感激を表現しようという声が挙げられていたが、来る 27 日の第 37 回海軍記念日を迎えるにあたり、是非ともこれを実現しようという気運が上昇し、本社(呉新聞社)の斡旋と呉鎮守府ならびに海軍協会呉支部の後援により、いよいよ「呉海洋美術協会」が結成されることになった、すでに実行委員数次の打合せも行われ『本協会は絵画および彫刻を通じ海洋美術ならびに海洋思想の普及をはかる』という会則も出来上り、会長ほかの役員も決定、来る 24 日から 27 日までの 4 日間、本社講堂で第 1 回海洋美術展を催し、力強い美術報国の第一歩を踏み出すことになった、時局柄海洋思想の普及という重大使命と海軍当局の後援によって美術家たちは非常に張り切っている、その成果は大いに期待されておるが、次第によっては呉市のみならず、横須賀、舞鶴、佐世保などの軍港都へも呼びかけようという意気込みを見せ、頼母しい誕生ぶりである、協会の事務所は本社内に置かれ役員は次の通りである。

【顧問】呉海軍人事部長宮里秀樹少将▲同第三課長口木口弍大佐▲呉鎮守府副官奥山繁雄中佐▲海軍協会呉支部副支部長三宅清兵衛▲呉市長鈴木登

【会長】呉市消防団長佐々木高栄

【副会長】呉新聞社主幹笠井明士

【総務】海軍協会呉支部幹事松中錬次郎▲広工廠朝井清▲呉新聞社軍事部長橋詰高時

【委員】呉工廠生田正雄▲両城校林義勇▲阿賀校鎌田知治▲航空廠吉田務▲呉工廠長田國夫▲呉県女村上静一▲呉一中安田信一▲辰川校藤川九郎▲男子校後藤良亮▲一般木村成美

【幹事】五番町校佐々木秀雄▲呉新聞社記者俣野義夫¹³⁶

そして、5 月 27 日に第 37 回海軍記念日を迎えるに当たり、同月 24 日から 27 日までの 4 日間、呉新聞社楼上で「第 1 回呉海洋美術展を開催し彩管報国に邁進する新たなる熱意を披歴すること」になり、「海洋美術の団体は地方的には呉市ではじめて結成されたもので、軍港都として当然とはいいながら、呉市に時局認識の深い真剣な美術家が多かったことは大いに誇ってよいだろう」とされる一方、「出品は 26 名 26 点で、その量は多いとは言えないかもしれないが、そしてまた絵そのものは如何様にも批評されようが少なくともこの 26 点の中に横溢している真剣さと覇気は中央の会などでは見られないものがある」「協会そのものが結成されたのが今月初旬であり、展覧会開催に関する準備を開始したのが中旬であったので、果たして展覧会が海軍記念日に間に合うかどうか憂慮されていたのであるが全会員の真摯な努力によって見事に開会できたことは喜ばしい」と急ごしらえの実情も見える¹³⁷。本展への出品者等の詳細は確認できないが、協会の構成員には広工廠に籍を置く朝井清を始め、互歩会や呉独立美術研究会の会員が名を連ねている。展覧会の開催を報ずる記事には「英米打倒を叫び、断乎として撃滅の火蓋を切ったわが帝国」¹³⁸などと述べられ、本協会成立の誘因には昭和 16 年 12 月 8 日の米英両国に対する宣戦布告による太平洋戦争の開戦という戦局の急拡大があった。

翌昭和 18 年にも第 38 回海軍記念日を迎えるにあたり 5 月 27 日から 4 日間、呉新聞社 3 階で第 2 回呉海洋美術展が「高まる彩管報国に挺身する新たなる熱意を披歴」するために開催された¹³⁹。展覧会の様子は呉新聞昭和 18 年 5 月 28 日付け「必勝の決戦調盛り 呉海洋美術展覧会盛況」で「わが帝国の堂々たる艦艦(軍艦)の□□や、艦艇内における海の将兵たちの日常活躍ぶりや、大東亜戦に取材の戦争画など(出品作家が)各自厳選のうえ一人一点のいづれも傑作揃いで、新緑の軍港都呉軍港に必勝の燃えあがる決戦調を盛って好評を博している」と報じられている。

また、すでに昭和 17 年年初には「呉市文化連盟」(詳細不明)を改組して「呉文化協会」と名称を改め、同年 1 月 18 日に発会式をあげて翼賛会の一部門として積極的に活動を開始すると報じられているが¹⁴⁰、昭和 18 年 3 月 20 日の呉新聞では「戦時下における文化運動の強力なる進展をはかるため」基本調査として呉市におけるあらゆる文化団体の「事業目的、会員数、設立年月日、名称、代表者氏名」などを町内組から至急市へ報告することになり¹⁴¹、その帰結として同年 5 月 15 日には、呉市翼賛会文化部の結成が次のとおり報じられている。

「聖戦建設の一環として、銃後文化の昂揚は生産の増強と相ともに必要なものであり、このため翼賛会では地方各文化団体を打って丸従来の一派一流を排し強力なる文化団体を結成、地方文化の推進に大なる寄与をなしつつあるが、かねて翼賛会市支部においても、地方文化団体の結合に尽力しつつあったところ、基礎調査もいよいよ完成し結成の機運も早急に醸成されるにいたった、すなわち呉市における文化団体については、市社会課更科主事が主となり調査を進めていたがこのほど、全部を完了した、これによると、呉海洋美術協会をはじめ呉文化協会文学部呉□□会など、その数百七十余団体に達している、しかしながらこれらの諸団体は従来ややもすれば一流一派に偏し、ただわづかに加盟会員のみの同好会にとどまり、あたら習熟した文化技能も地方文化の貢献にあづかるところ多しとしないであったのである、これによって翼賛会呉市支部の積極的尽力もあり、一部有志の奮起もあって、結成の機運は順調に育成し近日翼賛会市支部文化部として軍港都文化の建設に 170 有余の文化諸団体を丸、戦う文化戦士を結集せんとするものである、なお結成後の文化運動については各派各流を超えて軍港都文化の昂揚に邁進することはもちろんであるが、ただにこれのみにとどまらず、軍港都における地方文化の特異性を発揚、文化技能を総動員して、傷病兵の慰問をはじめ呉海軍将兵の感謝運動、産業戦士への激励など、文化建設の挺身隊として活躍することになっている」¹⁴²

そして、美術展覧会については、互歩会、蒼原会、独立美術研究会、純進美術展等の既存美術団体を「発展的に解散」し、打って丸となった「呉海洋美術協会秋季展」が呉新聞社階上で昭和 19 年 11 月 25 日から 2 日間開催され、以後毎年一回秋季の開催が予定された¹⁴³。

3. その後の戦時に関する動き

・昭和 17 年 8 月、海軍航空報国団主催の「趣味展覧会」が開催され、書道、絵画、手芸、俳句・短歌、国民学校書き方の分野

で作品公募が行われた¹⁴⁴。

- ・昭和 17 年 11 月 1 日から 3 日間、海工会館(境川通二丁目)で呉海軍工廠報国団主催の「勤労者の海の美術展」として第一回勤労美術展が開催されたが、呉・光・佐世保・舞鶴などの工廠の工員による油彩・水彩・版画など 200 点、「特に海をはじめ水に取材したこれらの美しい作品は水彩画を多数見せて、機械や船などを描いた職場の美術」作品が出品され、藤田嗣治、林倭衛、永瀬義郎、石井鶴三、前川千帆、朝井清が特別参考出品をした¹⁴⁵。
- ・昭和 18 年 1 月 1 日、呉海軍人事部第三課の伊藤上等機関兵曹が 50 号のキャンバスに米国艦隊を捕捉したわが潜水艦が至近距離に肉迫して攻撃し、魚雷が命中して大水柱が上がったところを描写し、完成後〇〇號士官室に贈られた¹⁴⁶。
- ・昭和 18 年 6 月 3 日から 4 日間、中国新聞主催の「海軍への献納画内示展」が呉新聞 3 階で開催された。これは広島市在住の洋画家で文展、二科展、独立、春陽会、国展などへの中央展入選者 46 名が描いた 10 号前後約 100 点を内覧したもので、一般への展覧後は呉海軍人事部へ納め、軍人の慰問のため軍艦に献ぜられた。広島県産業奨励館(5 月 27 日-30 日)での内覧に続き呉で展覧されたものである¹⁴⁷。
- ・昭和 19 年 7 月 15 日から 2 日間、呉新聞社 3 階で呉海洋美術協会の主催で海軍献納画展覧会が開催されて 80 点が出品され、7 月 20 日の海の記念日に海軍(潜水艦、海軍航空基地隊将士)に献納された¹⁴⁸。

この間、呉ゆかりの画家たちに目を転じれば、既述のエピソードのほか、画家たちの応召がしばしば報じられている。呉独立美術研究会の鎌田功治は昭和 12 年に中国に出征しており、戦地から戦線風景を同会第 4 回新作小品展覧会に出品し¹⁴⁹、互歩会の小阪秀雄は昭和 14 年頃中国に出征しており、戦地から呉新聞社あてに戦地のスケッチを寄稿するなどしている¹⁵⁰。なお、鎌田功治は「皇国のために最後まで働きます」と応召したが、昭和 13 年 7 月頃の所属校への陣中だよりに同封された歌日記には戦場を目の当たりにした画家の真情が吐露されており、戦争の実態の一端が伝えられている(資料集、p181)。

南画・歴史画を得意とした日本画家、和田陵雨(明治 42 年に来呉して呉奨美会の設立に参画し、京都・東京方面で画業を研鑽した後、昭和 9 年に再び来呉、呉市外天応の別荘に籠居)は昭和 14 年 10 月 83 歳で、一万枚色紙揮毫会を開催し、その売上 3 分の 1 を国防献金した¹⁵¹。また、時局に応じて高まる兵員増強の必要性を背景に、画家たちは呉海洋美術協会員として「征こう海へ」(昭和 17 年 9 月 19 日-)「続け若人」(昭和 18 年 8 月 26 日-)などと銘打ち海軍志願兵募集ポスターの図案を新聞紙面に提供するようになった¹⁵²。長田国夫は呉海軍工廠製鋼部から人事部第三課に転属となり、海軍の広報ポスターや海軍関係者の肖像画を手掛け¹⁵³、田口正人は満州にわたり、満鉄の広報ポスターの原画を制作したと伝えられ¹⁵⁴、柄谷繁夫は、軍神上田兵曹長の在正中を 40 枚に描き上げるべく資料収集の旨が昭和 18 年 8 月に報じられている¹⁵⁵。

5 昭和前期の呉美術の概況(まとめ)

(1) ポベニエ会から互歩会、呉独立美術研究会へ

昭和の時代の幕開けとともに、呉市として最初の本格的な絵画団体「ポベニエ会」(昭和 3-10 年頃)が誕生した。新生の絵画団体らしくみずみずしい「自由と澁刺、屈託のない心意気¹⁵⁶」を発散し巧拙、主義主張等様々な観点から未分化の団体であったようだ。やがて、ポベニエ会はその役割を終え、ポベニエ会が母体となって「互歩会」「呉独立美術研究会」が結成された。「互歩会」(昭和 7 年-21 年)は水彩画中心の団体で、会設立の機縁となった初期の指導者・山下品蔵の教え「真面目な写実¹⁵⁷」を堅持し、穏健で写実的な作風を特色としていたことが推察される。しかし、所属会員たちは官展を始め、独立美術協会を除く二科会、二部会、一水会、国画会、春陽会、白日会、日本水彩画会など革新系から保守系まで幅広い中央の展覧会に入選者を輩出しており、その画風・方向性の多様性ととも表現・技術の成長ぶりを物語っている。水彩画団体では、呉蒼原会(昭和 7 年発会)も結成されて互歩会会員の多くが参加するなど、水彩画は呉の美術の普及・振興において一大潮流をなす中で、中西利雄らが主導する新興水彩画への傾倒を強めて行ったことが推察される。一方の「呉独立美術研究会」(昭和 11 年発会)は、内面性の表出を重んじ、フォービズムの画風を基調として「新時代の美術の確立」を目指して昭和 5 年に設立された当時の前衛美術の旗手であった独立美術協会の地方組織であり、その気風はおのずから推し量られる。例えば、同会の中心的画家の一人、鎌田知治のポベニエ会時代の作品について、水船三洋は「非常に勇敢な人らしい。恐ろしくキツイ絵だ。(中略)野趣の横溢した奔放で自由な世界を称えます。こんなものを見ると貧乏臭い絵などは犬に食われてしまえという気がします。¹⁵⁸」と評している。また、新聞紙面には「県下洋画壇の最前線に君臨している呉独立美術研究会」¹⁵⁹等の文言が踊り、鎌田知治が「全国的に見て呉程^{ほど}独立展入選の多い地方はない」と語るように、構成員のほぼ全員が母体となる独立美術協会展に入選を果たしており、特に宇根元警は昭和 15 年第 10 回展で独立美術協会賞受賞に輝いている。このように、呉画壇の成熟とともに、画家たちは自らの主義・主張に基づき制作するようになり、画家としての力量を磨いていった様子が読み取れる。

(2) 戦前呉の美術における教員の姿

彼らはほぼ有職の画家たちであり、多くは学校教員や工廠など呉海軍の関係者であった。学校教員に関して見れば、呉市小学校教員図画作品展など教職員による展覧会では、互歩会、呉独立美術研究会の構成員たちが肩を並べて作品を出陳している。また、その教育における指導の姿勢には「学校的絵画の域」「学校の図画」という観念にとらわれない¹⁶⁰など自由画教育の理想主義(美術による人格形成)を継承する心意気を感じられ、彼らが本職の教職に創作活動と同等の情熱を傾けていたことは、長田健雄が教諭として指導する呉市立高等女学校の生徒が全国高等女学校図画展覧会(婦人世界主催、文部省後援、昭和 4 年 11 月)で全国女学校からの応募作数千点の中で金牌(特等 3 点中、水彩画静物ぶどう 8 号)を受賞したことや¹⁶¹、ポベニエ会同人で呉

市東本通小学校訓導の宇根元警が第 1 回独立美術協会展に入選を果たした際に紹介された「同氏の絵画研究はすでに呉市では有名であるが勤務の学校においては一切絵画の筆をとらず吉浦町の自宅に帰って後毎夜朝の三時四時まで刻苦して勤めは完全に果たしているのと同校伊達校長もその熱と努力に驚嘆し激励とともに種々の便宜を与えている¹⁶²」等のエピソードが物語っている。また、八幡通及び阿賀小学校で教鞭をとった鎌田知治は、「児童を熱愛することまた有名で、幾多の児童から慕われ¹⁶³」しており、「図画をして子供の魂の美を深めていかねばならぬ¹⁶⁴」と知識偏重に対する美術教育の重要性、子どもの感性を尊重し大人の基準によらない評価の重要性を説いている。さらに、彼らが中心となり指導者となって、同僚教員を初めとして美術文化の普及に尽力したことは、バムボ会や呉蒼原会の成立経緯等により推し測ることができる。

(3) その他の戦前の呉美術の諸相

その他の美術団体としては、賀茂郡広村(現・呉市広)で地元出身の朝井清、池田栄廣、堀内唯一らが中心となった「二級美術院」(昭和初年頃-)が組織され、著名作家の作品の招致、地元アマチュア作家の作品や児童作品の募集・展示など、幅広い美術の普及・奨励を展開していたことが注目される。また、呉市と広島市を中心に個性と自由を標榜して設立された「インデペンデント会(昭和 4 年発足、昭和 6 年海港洋画家協会と改名)」は、山路商、鬨光らが参加するなど前衛的な姿勢が想像され、呉からは益川智明、藤川九郎、船田信夫(玉樹)が参加した。また、特色ある団体として朝井清による「創作版画倶楽部」(昭和 11 年発足)が、当時の新興美術である創作版画の普及に貢献したことは、南薫造が創作版画のパイオニアと位置づけられることや、一時呉に寄留して制作活動した平川清蔵、東京で創作版画運動に身を投じた水船六州等に関連づけられて興味深い。

大正時代の呉美術界は日本画が主流であったところ、昭和時代では、管見では日本画の団体としては芸柱社が広島・呉両市の画家を社友として存在していたことが詳細は不詳ながら知れるのみだが、むしろ個人としての活動に目を見張るものがある。池田栄廣が帝展、後に院展で活躍しながら地元美術文化の振興に尽力し、片岡京二は「孤立無援、独立独行、信ずる芸術の殿堂に向かって血の出る精進を行っている(中略)その絶対無妥協、無迎合な性格と境地とは長く容れられなかった¹⁶⁵」と評されて大正時代から特異な創作姿勢が注目され、続いて、船田玉樹は洋画から出発して日本画に転向し、日本美術院に軸足を据え、歷程美術研究会、自由美術家協会、美術文化協会等に参加して日本画の前衛を追求し、また三好光志も、洋画に始まり独立美術協会等で活動したのち、日本画に転向、青龍社で日本画家としての地歩を築いたのち新興日本美術院に移籍して独自の道を歩んだ。

また、本稿 18-20 ページに示す如く、広島県画壇、中央画壇での呉ゆかり作家の活躍はもはや珍しいことではなくなり、受賞の榮譽に輝く者も多く輩出した。

(4) 戦時下の呉の美術家たち

このように、水彩画を中心に堅実で穏健な美術が普及する一方

(水彩画においても「蒼原会」系新興水彩画への傾倒を強める)、呉独立美術研究会、インデペンデント会(海港美術家協会)、あるいはプロレタリア運動とも親近性のある創作版画の流れ、片岡、船田、三好ら独自の表現を追求した日本画家たち、などの動向にみられる前衛志向・革新志向がもう一つの呉の美術の特色として浮かび上がってくる。しかしながら、戦時体制の緊迫化とともに、海軍が後援する呉海洋美術協会が結成されて呉市翼賛会に統合され、文化戦士としての報国が求められ、表現・活動上の制約を受けることになる。軍事機密を擁する海軍都として呉の美術界が厳しい統制・監視下に置かれていたことは、藤川九郎の回想「太平洋戦争の頃、呉地区はA級要塞地帯で野外写生は厳禁、カメラ・スケッチ道具は持って歩けず静物画でさえ鎮守府の検閲が必要であった。焼山でスケッチしていると憲兵が来て呉の中通9丁目の憲兵駐屯所へ連れて行かれ一夜泊められた。私の(勤務先の)学校の校長先生に来てもらって帰ることができた。一生一度の失敗である。¹⁶⁶」等によりしばしば語られるところである。

だが、昭和17年5月に既存美術団体が「呉海洋美術協会」に吸収・統合されてから後も、実質的に呉の美術界を「打って一丸」とした終戦間際の「呉海洋美術協会秋季展」(昭和19年11月15日-16日、呉新聞社)開催に至るまで「互歩会」「呉独立美術研究会」「蒼原会」など本来の名称でのグループ展が継続されており、戦時体制下においても、各団体の自主的な活動が継続されている。その背景には、海軍都の一面として、全国各地から将兵や労働者が集まり(呉市の人口は昭和元年に146,800人、昭和18年に404,257人(戦前に六大都市に次ぐ規模を誇った広島市に拮抗)、令和3年は201,229人(全国126位)¹⁶⁷)、呉にはこの地方に旧来の「安芸門徒」と呼ばれる浄土真宗以外の宗派はほとんど見られなかったところ、出自の異なる人々の流入とともにキリスト教(聖公会、メソジスト、バプティスト等)や日蓮宗、曹洞宗、真言宗、天理教、金光教など様々な宗教が招致されて多様な価値観を内包するようになり、異なる信念・思考、個性・人格が隣接して共存する日常生活の中で、精神や行動様式の近代化や都市化が進んだ社会環境を想像することもできる。

とは言え、そこには朝井清が「大東亜戦争以来東亜から敵性美術が駆逐されてありますが、版画は日本独特のものであり、先般翼賛会文化部に日本版画報国会が設立されたのも版画において東洋美術の日本独特の力と熱と技術をつぎ込んで新世界に日本独特の美術を知らしめようという点にある(後略)」¹⁶⁸と述べたり、「呉地方画壇の進歩的な中堅団体である独立美術研究会」が「新体制に報じ日本人として恥づかしからぬ独自の民族国家主義の文化体制を創りあげるべく努力を傾け(鎌田知治談)」¹⁶⁹たり、時にちぐはぐな印象を受けるこれらの言動には画家たちの創作意欲と戦時体制とを折り合わせようとする葛藤を読み取ることはできないだろうか。また、鎌田功治が戦地で詠んだ歌(資料集、181ページ掲載)からは、国民精神総動員運動など内心の自由さえも束縛される戦時下において、戦場の実態に遭遇した画家の人間性や良心とそのやるせない真情を感じ取ることができる(この歌が新聞報道されていることも意外な印象を受ける)。このように時代の波

に翻弄されながら、戦前、呉の画家たちの示した多様性、革新性、自由主義的傾向は、此処が東洋一の軍港都という厳戒体制下にあった環境を考え合わせるとき、ことさら眼に焼き付いた残像のように消えない。

なお、昭和11年6月2日に呉・広観光協会の招聘で当時の美術界で一世を風靡した寵児・藤田嗣治がマドレーヌ夫人とともに呉を訪れたことは、戦前の海軍都・呉の華やきを語る一幕であった。商工会議所、市役所、鎮守府を表敬訪問の後、音戸町に赴き音戸の瀬戸と清盛塚をスケッチ。同日夜の歓迎会は呉市主催で中通のトキワ軒で開かれ、呉市、音戸町、広村の関係者のほか、呉に滞在中の永瀬義郎夫妻、長田健雄、野村義郎、朝井清、藤川九郎、生田正雄、中塩(幸造または芳包)らが出席した。藤田は「フランスでもドイツでも世界の名ある外国の軍港は申し合したように海軍の兵隊がつねに酔いどれて一見ダラシなくさかんに女をからかっている風景だが一大軍港地呉ではさらにそんな情景がなく、さすがに規律正しく品を含んでいるのを発見して、実に驚いたりよるこんだりしています、実にうれしい」と呉の印象を語っている。同日夜9時過ぎに本通・中通の夜景スケッチの「肚をつくるべく(筆者注:構想のため)」散歩に出かけ、翌3日は広村で二級滝をスケッチ。後日、藤田の原画を絵葉書として原色版凸版印刷して一万組作成し、呉市の観光を宣伝するために配布された。絵葉書は呉市本通夜景、二河峡、鯛の宮の三枚一組であった¹⁷⁰。(図版p66)

III 終戦後 -戦火を越えて-

戦争末期、昭和20年に呉市を襲った度重なる空襲(3月19日(呉軍港)、5月5日(広工廠、第11海軍航空廠)、6月22日(呉工廠)、7月1-2日(呉市街地への焼夷弾攻撃)、7月24日(呉軍港)、7月28日(呉軍港))により、呉市は壊滅的被害を受け、同年8月15日の敗戦により、明治19(1886)年以来の軍港としての歴史に終止符を打った。さらに、呉市は敗戦から1か月後に枕崎台風により重ねての苦難に見舞われた。そうした状況下で占領体制の構築が進められ、呉にはアメリカ軍の中国軍政部、広島軍政部が置かれ、英連邦占領軍の治安部隊と同司令部、および基地部隊が駐留することになった¹⁷¹。

1 芸南文化同人会¹⁷²

焦土と化した呉市が時を置かず復興へと動き出す中で、文化の芽も再び芽吹き始めた。終戦直後の生活にも窮する時代に、早くも形を成したのが、昭和21年初頭に設立された芸南文化同人会であった。

その中心となり原動力となったのが、郷里・安浦町に疎開していた南薫造と、妻の郷里・安芸津町に疎開していた版画家の永瀬義郎(1891-1978)であった。

同人の一人、中野正英によると、会長を永瀬義郎、事務局を頼家の別邸「聚遠亭」(竹原市)とし、発起人を、谷本剛平(竹原高等女学校、画家)、浜本武一(忠海、画家)、佐瀬景堂(安芸津、三井造船勤務、日本画家)、神原文雄(安芸津、正福寺住職)、松浦功(風早駅助役)、伊藤勇(安浦、画家)、朝井清(呉市、画家)、中村博・郁夫兄弟(呉市、印刷業)、神田周三(画家、広島市)、中

野正英(安芸津、薬剤師)として創立された¹⁷³。その組織は、美術部、工芸部、音楽部、文芸部、政治経済部、生活指導部などにより構成され、竹原本部、安芸津支部、呉支部などが置かれていたようだ¹⁷⁴。やがて南薫造が顧問として迎えられ、南は会員たちを伴ってしばしば瀬戸内沿岸、島嶼部にスケッチ旅行に出かけた。

この会の設立趣旨や活動内容は、全2号という短命に終わったが、その機関誌として刊行された『芸南文化』(昭和21年8月・夏季創刊号、同年12月・秋冬合併号)(図版、p104)に垣間見ることができる。本誌には永瀬義郎、朝井清、神田周三、迦洞無坪(1891-1947、生野島の陶芸家)などの美術家を始め芸南地方在住の会員らがエッセイを寄せ、表紙を含む全編が朝井清による木版画で飾られ(一部は朝井の子息である美水が手掛けている)、会員である中村博・郁夫兄弟が経営する呉市蔵本通の大同印刷株式会で印刷された。

活動全体に流れる思いは創刊号の「巻頭言」として掲げられた永瀬の文章に現れている。それは「我々は石に挫がれた雑草である。」というフレーズが繰り返されて進行する詩文調の文章で、敗戦後の自らの姿を石に行く手を阻まれながらも屈せず成長する雑草に例え、「敗戦日本の人民には生存があつて生活がない、所が今日となつては其生存でさえ危機に直面してしまつた。従つて、新日本建設とは先づ生存の危機を突破し、同時に人間生活を取り戻す事から始めなければならない。人間生活を常道に置いて始めて新建設は可能になるのである。」と述べて、文化による人間性の回復と戦後復興を志向し、「この我々の強靱な意思の力は、やがて雑草に美しき花を開かせ、立派な実を結ばせずにはおかないと信じるものである。」と結んでいる¹⁷⁵。

また、中野正英は、占領政策に対して「(かつての戦勝国は敗戦国を滅亡に追い込んだが)現代に於いては敗戦国民に生きる道を教えている、滅亡のかわり更生への道が与えられている。それは世界の良心とも言えよう。暖かい人類愛とも言えよう。」と述べて占領体制に対して受容を示し、復興を担う労働者大衆への慰労と共感の念から、地方文化や大衆文化の普及と向上の必要性を述べ、それを実現する上で中央の文化人など指導的立場にある人々の果たすべき役割を述べている¹⁷⁶。

そして、中村郁夫は『芸南文化』について、「永瀬氏は私たちに『仮面』と『詩と版画』(いずれも永瀬が大正期に参画した文芸雑誌)を示されて…、同人雑誌『芸南文化』創刊号も文化の高い、明るい雰囲気の下に創作版画を美しく、力強く生かしたものにしたい。従来忘却されがちだった地方文化向上のためにも、又現下の食料事情の逼迫した秋に、少しでも民衆の心に糧を与え、そして日々の生活により、明るい、楽しい光を投げたい…と言われた。」と永瀬の言葉を引用し、「今やここに生まれ出ようとする『芸南文化』創刊号も、新しい民主化日本の『第二の仮面』として『第二の詩と版画』として進んでいきたいと思っている。燻製のように乾枯らびた現在の生活に、そして人々の心の裡に、少しでも明るい光と潤いとを齎すことを念願しつつ…。」とその創刊に込めた思いを語っている¹⁷⁷。

同人会の具体的な活動内容については、同誌「芸南文化録音」

で以下のように報告されている。

「(昭和21年)3月3日-5日 於竹原高女、「美術部」第一回美展を行う。出品四十二点、出品者永瀬会長、朝井清外同人六名。

4月21日 於海田市公会堂、「生活指導部」文化講演会。講師永瀬義郎(笑いをとりもどせ)、中野正英(生活の科学)、中江大部(日本の化学の世界的水準)。講演会終了後音楽と美術に関する座談会を行う。

4月22日 於呉市パレスダンスホール、大毎主催にて、進駐軍と女学生慰安音楽会開催。歌手木村譲外、豪軍ハンソン軍曹のピアノ伴奏等、微笑ましい風景であった。

5月1日 於竹原高女、東京音楽学校教授岩本真里嬢の提琴独奏会を開催。雨中参集した聴衆一千名に深い感銘を与えた。

6月1日-9日 於呉市中通マーケット「はこ舟」にて永瀬義郎、朝井清、山下品蔵三人展を開催す。

8月2日 竹原町にて進駐軍文化部長を招き音楽と舞踊の会を開催し、日本の美しい一面を鑑賞して頂き、日豪親善の有意義な日だった。

8月8日 風早沖藍の島にて同人会総会を開く。佐瀬、朝井、中野、松浦、中村、濱本、高原外同人相集い、企画部、美術部、文芸部、生活指導部からの諸計画が飛出し、着々と郷土に文化の礎石を打っていく日も近いだろう。総会后、スケッチ会、競泳会、果ては、納涼幽霊座談会に迄発展し、夕立雲に驚き午後四時散会す。

8月25日 海外同胞救出呉学生同盟と共同主催で呉で美術部同人の色紙及小作品の頒布会を開き、買上全部を海外救出基金として寄付をする。」¹⁷⁸

「9月23日 編輯会議(文芸部) 安芸津町山水喫茶部にて開く。会長、朝井、中村(博)、神原、日高、松浦、濱本、高原、中野、柄、中村(郁)出席。終了後、正福寺にて新に顧問になられた西尾襄氏を囲み、南方文化の座談会を開く。

10月2日-15日 瀬戸内海 万葉の旅 同人美術部朝井清、文芸部中村博の両人は「瀬戸内海と万葉歌」の歌枕を訪ねて行脚に出で、版画スケッチと紀行文の完成の為秋の内海を廻った。

10月15日-25日 瀬戸内海・新観光ルートを探る 南、永瀬、神田画伯、作家畑耕一氏、高田保氏、井上康文氏、林学博士、田村爾氏の一行は瀬戸内海新観光ルートを探る為画囊と詩情を膨らませながら秋の海、紅葉の島々を廻られた。

10月27日-30日 美展(美術部) 呉・蜂の巣文化ホールに於て、南画伯、永瀬会長、神田、堀内、朝井、山下、中野、佐瀬、伊藤、萩原、濱本、谷本、樫村の諸氏出品三十点あまり盛会なり。10月30日(日)南、永瀬両氏を囲み、喫茶ロックにて座談会を開き記念撮影をする。

11月15日-17日 呉市文化祭美展 呉市平和建設週間美展に呉支部(美術部同人)より応援出品す。朝井、堀内、柄谷、空野、吉田、林、濱谷、梶田、柏村、原田、正法地、西木、梅次の諸氏、各人一点宛出品。

11月24日 レコード・コンサート 茶房・新世界で呉支部レコード・コンサートを開く。(曲目、第九交響楽・メンデルスゾーン提琴協奏

曲・ベートーヴェン皇帝洋琴協奏曲・スペイン協奏曲外) 終了後記念撮影及び座談会を開く。

12月1日 スケッチ会(呉支部美術部)八時集合、上畑付近で呉支部美術同人のスケッチ会を開く。

12月13日-15日 呉支部総合展 蜂の巣・文化ホールにて永瀬、神田、山下、恩地、前川画伯の特別出品と呉支部(美術、写真)同人の総合展を開く。

12月15日 呉支部懇談会、レコード・コンサート。美展最後の日蜂の巣会議室にて第二回呉支部レコード・コンサート及呉支部懇談会を開き、記念撮影をする。¹⁷⁹

このほか、翌年の4月3日から5日にかけて、竹原照蓮寺において、第6回芸南美術展覧会が開かれたことが伝えられている。この展覧会には、浜本武一、天野丈作、故・水戸範雄、中野正英、朝井清、佐瀬景堂、萩原純児、故・永田瑞枝、柄谷繫夫、伊藤勇、永瀬義郎、南薫造、神田周三が、合わせて46点を出品した¹⁸⁰。物資不足の終戦直後のことゆえ、旧作品か、それに加筆するか、4号くらいの小品をキャンバス代りに板を切って間に合わせ、手元のなげなしの画材をかき集めて創作したという¹⁸¹。

戦争は多大な惨禍をもたらしたが、唯一とも言える恩恵として、戦争を契機とした文化人の疎開に伴い、関東や関西の中央文化が地方へと流入したことがある。南薫造を通して、洗練された一流の洋画文化に触れ、その温厚で高潔な人柄に身近に接したことや、長い滞仏経験と華やいだ国際性、そして創作版画を初めとして文学や演劇など幅広い芸術性を持つ永瀬義郎と協働の機会を得たことは、芸南文化の同人を始めとする地域住民にとって戦後を生き抜く上で大きな刺激と活力となったに違いない。南は昭和25(1950)年に急逝し、永瀬は昭和27(1952)年に安芸津を離れて再び上京し、芸南文化の活動は各人、各地方の活動に収束されていくが、同人であった浜本や中野にとって「もっとも美しい思い出」として記憶されているという¹⁸²。

2 呉美術協会の誕生

前節の「芸南文化録音」の記録に見られるように、芸南文化同人会の活動は呉で実施されることが次第に多くなり、やがて、地元在住の美術家が集まって1946年11月に呉美術協会が成立する。

その創立が昭和21年11月23日の中国新聞に次のように報じられている¹⁸³。

「呉美術協会の役員決定

かねて設立準備中であつた呉美術協会は、白玄会、裸身会、芸南文化同人会など市内各美術団体および市社会教育課が発起人となり、二十一日発足の運びとなつた、同協会の目的は呉市を中心とする美術の昂揚を期し且つ美術愛好者の技術向上をはかるもので、毎年一回以上公募展を開催するなどが計画されている、同日決定した役員は次の諸氏

【名誉会長】呉市長 【副会長】朝井清 【理事】藤川九郎、柄谷繫夫、堀内唯一、空野末人、生田正雄、吉岡繁人、村上哲也、林俊哉、川端義男、矢田邊清芳、船田玉樹

発足当初の美術協会には、会長職が空席となっている。これは、南や永瀬を心の会長とし、呉の地域美術に対する彼らの貢献へ

の尊敬や感謝の念が表されているのではないかとする見方もある¹⁸⁴。

記事中の「白玄会」は昭和21年7月に互歩会を発展的に解消して設立された団体¹⁸⁵、「裸身会」はパムポ会や純進美術展を率いた村上哲也を中心に同年9月に結成された油絵の団体で¹⁸⁶、副会長の朝井清を始めとして、理事には藤川、生田、柄谷、船田など、戦前から戦後にかけての激動の時代を乗り越えて創作活動を継続し、牽引した人々がその責を担っている。そして呉美術協会の内外からは、やがて、創画会(宇根元警ら、昭和25年発会)、ヤネウラ同人(安久一郎ら、同年結成)、日本水彩連盟広島県支部(藤川九郎ら、同年結成)、合同美術協会(村上哲也ら、女性美術団体の彩光会と男性美術団体の呉アンデパンダン協会が合同、翌26年)などが胚胎し、また、軍港地の厳しい制約下で振るわなかった写真の創作活動が戦後息を吹き返して全日本写真連盟呉支部が結成される(昭和27年)などの展開を見せた¹⁸⁷。なお、戦後の呉美術協会を中心とする呉の美術の概況については、故清田内匠氏(元呉美術協会副会長)による「くれ」文化小史(呉美術協会50周年記念誌『美術くれ』呉美術協会/平成8年所収)、を転載させていただいた(p110)。

戦後の呉市が海軍工廠等によって培われた工業技術を礎に重工業都市として復興していったように、美術においても、戦前に築かれた蓄積と体験を礎に、様々な価値観を包含しながら、新たな道が開かれていった。戦後間もない衣食住にも窮する厳しい時代に呉市において胚胎し、営まれて来たこれらの活動は、特に苦難の時代においてこそ、美術を含む芸術が、人間が生きていくためにかけがいのないものであること、「芸術は人類の生命維持装置」(2020年、ドイツ文化相発言)であることを物語っている。

おわりに

呉の近現代美術史に関しては、これまでに、呉独立美術研究会、三好光志(以上、向井能成氏による既出論文)、南薫造、上田直次、船田玉樹、船田仙花等についての団体・作家研究がなされてきたほか、冒頭で紹介した『呉市史』第4-7巻、倉橋清方氏による「呉美術協会の発足と大正～昭和戦前期の呉美術」や、千田武志氏による「呉市美術界の特徴と呉美術協会の成立」(呉美術協会50周年記念誌『美術くれ』呉美術協会/平成8年)、『「呉線沿線の美術」展図録』(呉市立美術館/平成19年)等により概論が語られている。本稿は、これらに触発されつつ、「呉」の近現代美術史を全体としてより具体的にリアルに本当にあったこととして実感したい、という思いから取り組み、そして、呉にゆかりの美術作品を一堂に展示することにより何が見えてくるか、という思いから本展を企画した。このため、本稿の叙述が羅列的で冗長となった恨みがあり、背景となる歴史理解が未熟にもかかわらず、対象とする美術分野が多岐にわたるといふ、当方のキャパシティを越える無謀な取組となつてしまった。しかし、未熟ながら呉の美術についてある程度の像を結ぶことができたと考えている。また、今回は展示室の広さ、時間及び研究の熟度などの制約から現代美術にまで対象を広げることができなかったが、今後も「呉」をテーマとする研究や展覧会を様々な視点から企画・実践することで、美術を通

して、呉の歴史・社会・文化への理解や関心を深め、広げていくことができればと祈念する。

戦後の呉美術については、故・清田内匠氏による「くれ」文化小史(p110)及び横山勝彦当館館長(p175)にバトンを渡し、こ

で筆を置くこととする。本展、本稿に対するご意見、ご批評をいただければ幸甚である。

(呉市立美術館 学芸員)

【脚注】

- 1 倉橋清方「呉美術協会の発足と大正～昭和戦前期の呉美術」『呉美術協会創立60周年記念誌美術くれ』(呉美術協会/平成18年3月)p10、「呉奨美会」『中国新聞』大正5年11月18日
- 2 「3点中2点まで売却済みとなった常光雪山氏」『芸備日日新聞』昭和2年5月19日
- 3 倉橋清方「呉美術協会の発足と大正～昭和戦前期の呉美術」『呉美術協会創立60周年記念誌美術くれ』(呉美術協会/平成18年3月)p10、「美術の呉(其の九)露の人」『中国新聞』大正6年3月30日
- 4 倉橋清方「呉美術協会の発足と大正～昭和戦前期の呉美術」『呉美術協会創立60周年記念誌美術くれ』(呉美術協会/平成18年3月)p10、「美術の呉(其の八)露の人」『中国新聞』大正6年3月27日
- 5 倉橋清方「呉美術協会の発足と大正～昭和戦前期の呉美術」『呉美術協会創立60周年記念誌美術くれ』(呉美術協会/平成18年3月)p10、「美術の呉(其の九)露の人」『中国新聞』大正6(1917)年3月30日
- 6 倉橋清方「呉美術協会の発足と大正～昭和戦前期の呉美術」『呉美術協会創立60周年記念誌美術くれ』(呉美術協会/平成18年3月)p10
- 7 「白耀会展覧会評記(三)半兵衛」『芸備日日新聞』(大正9年11月27日)に「華溪氏の「山水」南画と四条と混合した手法と見る運筆の軽妙なる多くの比を見ない構図も整うて居る」とある。
- 8 「郷土出身画家遺作展」(楠苑 三島食品資料館、2000年5月)パンフレットに小田宮華溪の師系、和田華岳、和田菁華が南北合法である旨が紹介されている。
- 9 「新緑の光輝く庭に美術の花を咲かす 昨十三日正覚寺に於ける美術協会発会式の模様」『中国新聞』大正6年5月14日
- 10 「美術協会協議 会長には平松氏を」『中国新聞』大正6年5月15日
- 11 「日曜画会の即売展覧 三笠保存基金募集のため」『呉新聞』昭和2年4月8日、記事掲載時には活動歴10数年を経て会員30人を数え、三笠保存基金に寄付するため展示即売会を行った。
- 12 『呉市史』第4巻(呉市史編纂委員会編/呉市役所/昭和51年3月31日)p564
- 13 「呉東画伯 個人展覧会」『芸備日日新聞』昭和2年4月23日、「呉東画伯個人展」『中国新聞』昭和2年4月23日
- 14 出原均「年譜」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p89
- 15 「赤鳥会の出品 裸体画外二点 警察へ引あげる」『朝日新聞広島県版』大正8(1919)年11月25日
- 16 出原均「戦前における広島美術概観-洋画を中心に-」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p79、「赤鳥会展覧会今年は呉で」『芸備日日新聞』大正9年9月11日
- 17 出原均「戦前における広島美術概観-洋画を中心に-」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p78
- 18 出原均編「年譜」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p85、「絵画展覧会 広陵美術会主催」大正4年3月17日・「洋画が七分▲広陵美術展覧会」大正4年4月27日・「美術会の印象 西川生」大正4年4月29日いずれも『中国新聞』
- 19 「画界の新運動▲ザボン画会の立場」『中国新聞』大正4年9月14日
- 20 出原均「戦前における広島美術概観-洋画を中心に-」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p78
- 21 出原均編「年譜」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p85
- 22 「出品協会の設置」『芸備日日新聞』大正4年5月5日
- 23 出原均「戦前における広島美術概観-洋画を中心に-」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p78-79
- 24 出原均編「年譜」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p87-95
- 25 出原均「戦前における広島美術概観-洋画を中心に-」『広島美術の系譜』(広島市現代美術館/1991年)p78-79。
- 26 『呉市史』第4巻(呉市史編纂委員会編/呉市役所/昭和51年3月31日)p564
- 27 出原均編「年譜」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p90-91、「広陵美術界に新画壇 白陽会生れ展覧会開催」『中国新聞』大正9年11月4日ほか
- 28 米山竹亭「教員美展に対する感想」(上)(下)中国新聞大正15年3月6日-7日、山路商二「教員美展展私見」中国新聞大正15年3月15日
- 29 出原均編「年譜」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p95
- 30 出原均編「年譜」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p93-94
- 31 「前例なき厳選で 広島美展の蓋開け 16日から開会する ウンと標準あがる」『中国新聞』大正15年6月16日
- 32 『呉市史』第4巻(呉市史編纂委員会編/呉市役所/昭和51年3月31日)p564
- 33 「呉の「春草会」本日から展覧」『呉日日新聞』昭和2年2月19日、『呉市史第5巻』(呉市史編纂委員会/呉市役所/昭和62年)p684
- 34 『呉市史』第五巻(呉市史編纂委員会/呉市役所/昭和62年3月31日)p663
- 35 「洋画作品展覧会 ポベニエ会が海工会で」『芸備日日新聞』昭和4年1月19日
- 36 「呉ポベニエ会洋画展覧会を観る 呉銀行三階楼上で」『呉新聞』昭和4年10月6日
- 37 「呉ポベニエ会 第4回洋画展 大家の作品30余点 21日から5日間 山口銀行で大々的に開催す」『芸備日日新聞』昭和6年2月10日、「第四回ポベニエ会洋画展雄感(二)～(四)F・J・E生」『芸備日日新聞』昭和6年2月25-27日
- 38 「ポベニエ会展 28日から3日間 呉銀行階上で開く」『呉新聞』昭和8年4月27日
- 39 呉市文化振興課呉市史編纂グループ資料
- 40 『呉市史』第5巻(昭和62年/呉市史編纂委員会/呉市役所)p683
- 41 「青木氏追悼会 呉銀楼上で」『呉新聞』昭和9年4月21日
- 42 「呉ポベニエ会が対社会的に活動 近く展覧会を開く」『呉新聞』昭和6年1月23日
- 43 『呉市史』第6巻(呉市史編纂委員会/呉市役所/昭和63年)P1040
- 44 「展覧会 広二級美術会の」『呉新聞』昭和2年6月9日
- 45 「美術展覧会 広二級美術会の」『呉新聞』昭和2年6月9日、「二級美術院 第五回展覧会 児童の絵画も募集 広村公会堂に於て」『呉新聞』昭和5年4月25日、

- 「二級美術院第五回展覧会」『呉新聞』昭和5年4月26日、「二級美術院 五周年記念展覧会 児童の画作品も展覧 広村公会堂で開く」『呉新聞』昭和5年4月27日、「二級美展 入選の絵画 その総数九百余点 代表的優秀の作品」粒の揃った二級美展 優秀なる児童の作品 いよいよ本日限り『呉新聞』昭和5年5月25日
- 46 「二級美術院で 趣味作家展 地方豪華誇り二日間」『呉新聞』昭和12年6月4日
47 「第一回無所属洋画家展覧会十六日からブラジルで」『芸備日日新聞』昭和4年3月16日
48 「第二回展覧会洋画インデペンデント」『呉新聞』昭和5年4月27日
49 「インデペンデント展覧会十四日から三日間呉中国会館に開催」『呉新聞』昭和5年6月13日
50 「十四日から開会した洋画展」『呉新聞』昭和5年6月15日
51 「海港洋画協会 益川氏ら組織」『呉新聞』昭和6年6月3日、出原均編「年譜」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録』(広島市現代美術館/1991年)p106
52 「全関西洋画展広島側入選者」『中国新聞』昭和6年5月19日
53 「少壮洋画家美術展 8,9両日中国会館で」『呉新聞』昭和7年10月9日
54 「呉美術院」生誕 呉の絵画団体統一『呉新聞』昭和5年11月28日
55 長田健雄「第三回互歩会洋画展と山下画伯」『呉新聞』昭和9年10月31日
56 「互歩会洋画展 26,7,8の三日間 呉中国会館で開催」『呉新聞』昭和10年10月5日
57 「力作揃いの互歩会洋画展 5周年記念に適わしい豪華 総計6,70点に上る」『呉新聞』昭和11年10月28日、「きょうから三日間 互歩会洋画展覧会 創立五周年を記念して中国会館で開催」『呉新聞』昭和11年11月1日
58 「互歩会洋画展 昨日から中国会館 60数点の力作を」『中国新聞』昭和11年11月2日
59 『呉市史』第5巻(昭和62年/呉市史編纂委員会/呉市役所)第2節文化の向上 p685
60 「第6回互歩会作品展 文展その他入選者の力作品も 来月上旬、中国会館」『呉新聞』昭和12年10月21日、「秋の呉画壇を誇る 美し努力の足跡 互歩会洋画展 きょう蓋開け」『呉新聞』同年11月5日
61 井関三郎(潤徳女子高等学校美術科教諭)「長田国夫・その人と作品」『長田国夫作品集』(長田国夫作品集刊行委員会/平成8年8月)p52
62 「蓋あけと同時に大好評を博す互歩会洋画展覧会 きょうも雑踏の予想」『呉新聞』昭和8年11月12日
63 第2回「蓋あけと同時に大好評を博す」『呉新聞』昭和8年11月12日
第3回「呉画壇の豪華 互歩会洋画展 きょう限りで閉幕する」『呉新聞』昭和9年11月4日
第4回「互歩会洋画展 26,7,8の三日間 呉中国会館で開催」『呉新聞』昭和10年10月5日
第5回「力作揃いの互歩会洋画展 5周年に適わしい豪華 総計6,70点に上る」『呉新聞』昭和11年10月28日、「きょうから三日間 互歩会洋画展覧会 創立五周年を記念して中国会館で開催」『呉新聞』昭和11年11月1日
第6回「互歩会作品展 文展その他入選者の力作品も 来月上旬、中国会館」『呉新聞』昭和12年10月21日、「秋の呉画壇を誇る 美し努力の足跡 互歩会洋画展 きょう蓋開け」『呉新聞』同年11月5日
第7回「“互歩会”洋画展 11月2,3中国会館に 力作揃い光彩陸離」掲載紙・年月日不詳
第8回「互歩会洋画展(8)」『呉新聞』昭和15年11月2日
第9回「晩秋の呉画壇飾る 互歩会洋画展 16,17両日 本社楼上で開催」『呉新聞』昭和15年11月16日(本回は2600年奉祝として開催)
第10回「第10回互歩会洋画展 11月2,3両日本社で開催」『呉新聞』昭和16年10月29日
第11回「呉画壇の最高峰 あす互歩会洋画展開く」『中国新聞』昭和17年10月31日、「互歩会洋画展きょう開幕」『呉新聞』同年11月1日
第12回「年譜」『広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-展図録』p134(広島市現代美術館/1991年/出原均編)
- 64 「水彩画展入選 互歩会の五氏」『呉新聞』昭和11年2月29日
65 「互歩会作品展 文展その他入選者の力作品も 来月上旬、中国会館」『呉新聞』昭和12年10月21日、「秋の呉画壇を誇る 美し努力の足跡 互歩会洋画展きょう蓋開け」『呉新聞』同年11月5日
66 「呉画壇の最高峰 互歩会第8回展 来月3日晴れの開幕」『呉新聞』昭和14年10月21日
67 『呉市史』第5巻(昭和62年/呉市史編纂委員会/呉市役所)第2節文化の向上 p683
68 「呉独立美術研究会 第1回新作発表展 中国新聞後援で開く」『呉新聞』昭和12年5月25日
69 「呉独立美術研究会 第1回新作発表展 中国新聞後援で開く」『呉新聞』昭和12年5月25日
70 「呉独立美術研究会第二小品展 あすから福屋で開催」『呉新聞』昭和12年9月10日
71 「独美研究会の新作発表会 7月1日から呉銀で」『呉新聞』昭和13年6月24日
72 「鎌田氏の戦線風景が異彩を放つ “独美”洋画新作展」『呉新聞』昭和14年3月12日
73 「洋画新作展 26日から三日間呉銀行楼上で開く」『呉新聞』昭和14年5月24日、「力作揃いで異彩を放つ 洋画新作展蓋開け」『呉新聞』同年5月27日
74 「呉画壇に上る凱歌 独立美術協会展覧会へ四氏轡を並べて入選」『呉新聞』昭和15年3月12日
75 「2,3両日 独立美術展覧会 紀元二千六百年奉祝のため 中国新聞呉支局講堂で開催」『呉新聞』昭和15年3月1日、「春の画壇に一異彩きょうから開催される 独立美術展覧会出品作品決定」『呉新聞』昭和15年3月2日
76 「秋の呉画壇をかざる洋画新作展 10,11の両日 呉本社楼上で開催」『呉新聞』昭和15年11月1日
77 「呉画壇を飾る 独立美術洋画新作展 愈々10,11の両日 華々しく蓋開け」『呉新聞』昭和15年11月8日
78 「独立美術展に輝く入選の呉美研六氏(初入選は2氏)」『呉新聞』昭和16年3月5日
79 「軍港呉画壇を飾る第7回独立美術展 27日から本社楼上で開く」『呉新聞』昭和17年4月27日、「非常に盛会 独立美術洋画展」春の軍都 呉を飾る 洋画展開催 本社支社楼上で毎日盛況『中国新聞』昭和17年4月28日
80 「新作展 呉独立美術研究会」『中国新聞』昭和18年5月14日
81 向井能成「戦前呉市における洋画団体の変遷と創作動向」『芸術研究』第26号(広島芸術学会/2013年)p56
82 「絵画啓発のため 教員展を開く 呉市内の関係者が二月下旬作品を発表」『呉新聞』昭和7年1月31日、「呉市教員会の図画展蓋開け 第一回試みとして 素晴らしい好評」『呉新聞』昭和7年2月21日
83 「教員作品展 きょう蓋開け 出品を四部にわけ 中国会館で」『呉新聞』昭和8年2月11日、「玄人裸足の出来ばえ 蓋開けた教員展 きょう限りで閉幕」『呉新聞』昭和8年2月12日
84 「大作、力作揃い あすから中国会館で開かれる 小学教員図画作品展」『呉新聞』昭和11年4月3日
85 「呉に開く、春のサロン 絢爛! 光る力作揃い」『呉新聞』昭和12年3月4日
86 「第六回教員 図画作品展短評 鎌田知治」『呉新聞』昭和13年2月27日
87 「快調の蓋開け第7回教員図画作品展覧会 絢爛・花に魁く40余点」『呉新聞』昭和14年3月5日
88 「第一日から盛況 蓋開けの図画手工展」『呉新聞』昭和13年11月20日
89 「蓋開け以来盛況 第一回教員手工作品展」『呉新聞』昭和14年3月14日
90 「日本水彩展に就いて地方作家に告ぐ」『振興水彩』第2巻第4号/昭和12年(『近代日本水彩画 150年史』2015年/公益社団法人日本水彩画会/国書刊行会所載p218)
91 「春の呉画壇を彩る 第二回呉蒼原会洋画展 15,16両日 本社楼上で開催」『呉新聞』昭和16年2月14日
92 「蒼原会洋画展いよいよあすから五番町校で開催初夏の画壇に断然光彩」『呉新聞』昭和14年6月25日
93 「春の呉画壇を彩る 第二回呉蒼原会洋画展 15,16両日 本社楼上で開催」昭和16年2月14日『呉新聞』
94 「初秋の呉画壇を飾る 豪華 呉蒼原会展 26,7の両日 呉新楼上で」『中国新聞』昭和17年9月22日
95 『呉蒼原会展開く 出品作品実に33点』『呉新聞』昭和18年10月10日
96 「水船氏個人展一日から海工会で」『芸備日日新聞』昭和4年3月2日
97 小田富華「日本画家の見たる西洋画」『呉新聞』昭和4年3月3日
98 小澤生「水船三洋氏の個展を観て」『呉新聞』昭和4年3月8日
99 「素描社版画展 27,8の両日 呉中国会館で開く」『呉新聞』昭和7年8月24日、「素描社版画展初日は好評を博す 今日引き続き開会」『呉新聞』昭和7年8月28日
100 「朝井清氏の創作版画展 いよいよきょうから 中国会館で挙行」『呉新聞』昭和8年11月25日
101 『呉市史』第5巻(昭和62年/呉市史編纂委員会/呉市役所)第5章教育文化の向上第2節文化 p685、新興美術協会展には
102 「呉画壇の気を吐く 新興美術展に三氏入選」『呉新聞』昭和17年12月1日、「中島勉氏も版画入選 新興美術協会展」『呉新聞』昭和17年12月5日
103 三木哲夫編「日本創作版画運動」関連年表 1904-1945『日本近代の青春 創作版画の名品』(和歌山県立近代美術館編/和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010年発行)p255-256
104 「朝井清画個人展 22,23両日」『呉新聞』昭和17年11月20日
105 「朝井清画伯油絵版画展」『中国新聞』昭和18年11月21日
106 「愈よきょうから 洋画二人展 二日間にわたって 中国館で蓋あけ」『呉新聞』昭和8年10月14日、「長田教諭らの洋画二人展 いよいよ十四五日 準備万端 出来上る」掲載紙不明/昭和8年10月(呉市立美術館所蔵・長田健雄資料)
107 「長田画伯遺作展 来る二十、八九両日」『中国新聞』昭和15年4月2日、「長田健雄遺作展 28,9の両日 中国新聞呉支局楼上で開く」掲載紙不明/昭和15年4月(呉市立美術館所蔵・長田健雄資料)
108 「鞆谷氏個展」『中国新聞』昭和17年3月25日、「力作のみ出陣 鞆谷画伯水彩画個人展」『中国新聞』昭和17年8月30日

- 109「鎌田兄弟洋画展」『呉新聞』昭和12年3月14日
- 110「空野洲絵人氏個展3日間開催」『中国新聞』昭和18年5月2日
- 111「清芳画展」『芸備日日新聞』S11.11/14
- 112「矢田邊清芳画伯個人展26日から三日間開く」『呉新聞』昭和14年11月27日
- 113「矢田邊清芳画伯 第10回作品展 きょうから本社3階楼上で開催」『呉新聞』昭和16年11月28日、「矢田邊清芳画伯第10回作品展 絢爛70余点の作品に目を奪う」『呉新聞』昭和16年11月29日
- 114「矢田邊画伯作品展 名作のみ出陳」『呉新聞』昭和17年11月26日
- 115「春の真画壇を彩る 第5回洋画展覧会 9日から11日迄 本社楼上で開催」『呉新聞』昭和16年2月7日
- 116「純進美展 優秀作品陳列」『中国新聞』昭和17年3月20日
- 117「村上哲也氏個人展 20、21両日」『呉新聞』昭和18年3月20日
- 118「26日から総合美術展 搬入は23日」『芸備日日新聞』昭和9年11月2日、「広島総合美術展 26日から来月2日まで 洋画協会と芸社」『中国新聞』昭和9年11月2日
- 119「芸社展 きょうから本社の中国会館で催す」『呉新聞』昭和10年3月13日
- 120「早朝から観覧者が殺到 三好光志画伯の個人展盛況」『中国新聞』昭和18年10月15日、「非常に好評 三好画伯個人展」『中国新聞』昭和18年10月17日
- 121「私の展覧会について 土本薫」『呉新聞』昭和10年7月31日
- 122「パムボ会の美術展 本社楼上で開催」『呉新聞』昭和14年2月12日
- 123「春の真画壇を彩る 第5回洋画展覧会 9日から11日迄 本社楼上で開催」『呉新聞』昭和16年2月7日
- 124「純進美展 優秀作品陳列」『中国新聞』昭和17年3月20日
- 125「村上哲也氏個人展 20、21両日」『呉新聞』昭和18年3月20日
- 126「神田周三「藤椅子に」昭和美術展」『中国新聞』(昭和4年4月29日)
- 127「出原均「戦前における広島美術概観 一洋画を中心に」p80-81、出原均編「年譜」p106、108、109、110、112、115「広島美術の系譜-戦後の作品を中心に-図録」(広島市現代美術館/1991年)
- 128「同郷の情に刻む海鷲の像 広島美術展へ異彩」『呉新聞』昭和17年10月25日
- 129「藤崎綾(広島県立美術館)「芸州美術協会と広島美術家-眼のある風景」に到る巒光の活動を中心に-」『鹿島美術研究(年報第23号別冊)』2006年/財団法人鹿島美術財団 p245-256
- 130「植松少将の土産物 油絵展きょう公開 いづれも実地を模写されて 真に迫る逸品揃い」『呉新聞』昭和7年6月18日
- 131「美善兵曹の彩管 感激の「聖式」成る きょう神宮海軍館へ発送」『呉新聞』昭和12年4月25日
- 132「海洋美術展は愈々きょう蓋明け 海洋少年の意気を示す二百点 記念日を飾る金字塔」『呉新聞』昭和13年5月26日、「さすが軍都の学童 蓋開けた海洋美術展 立派な出来栄に画伯達驚く」『呉新聞』昭和13年5月27日
- 133「血湧き肉躍る実戦スケッチ展 追想に感無量の帰還将兵 俄然銃後の人気集まる」『呉新聞』昭和13年6月11日
- 134「小早川篤四郎画伯 海軍従軍画展覧会」『呉新聞』昭和14年11月17日
- 135「職員生徒の図画作品展 観覧者多く頗る盛況」『呉新聞』昭和16年6月26日
- 136「在呉美術家を一九 海洋美術協会生る 海軍記念日を祝賀して第1回展を開く」『呉新聞』昭和17年5月14日
- 137「海軍記念日祝賀 第1回呉海洋美術展」『呉新聞』昭和17年5月25日
- 138「海軍記念日祝賀 第1回呉海洋美術展」『呉新聞』昭和17年5月25日
- 139「輝く海軍記念日祝賀 第2回呉海洋美術展」『呉新聞』昭和18年5月29日
- 140「呉文化協会 あす、発会式を挙げる」『呉新聞』昭和17年1月17日
- 141「文化団体を統合 呉市が基本調査を行う」『呉新聞』昭和18年3月20日
- 142「軍港都の文化団体170余を統合(軍港都170余の文化団体を統合) 呉市翼賛会文化部結成」昭和18年5月15日『中国新聞』『呉新聞』
- 143「力作ぞろい 呉海洋美術協会秋季展」昭和19年11月26日『中国新聞』『呉新聞』、「呉海洋美術協会秋季展 各種展覧会を総合して開く」『中国』昭和19年10月24日
- 144「海軍航空報国団主催 趣味展覧会入賞」『呉新聞』昭和17年8月3日
- 145「第一回勤労美術展 一日から呉工廠報国団」『呉新聞』昭和17年10月29日、「一流画家の特別出品で異彩を放つ勤労美術展」同昭和17年11月1日、「力強い勤労美術に感嘆 渋谷工廠長、秋山総務部長視察」同昭和17年11月3日
- 146「潜水艦の活躍 伊藤上等機関兵曹描く」『呉新聞』昭和18年1月1日
- 147「海軍への献納画内示展 光彩を放つ」『中国新聞』昭和18年6月4日、「海軍へ献納画展 広島県産業奨励館で」『中国新聞』昭和18年5月28日
- 148「潜水艦並海軍航空基地隊将士に贈る 海軍献納画展覧会」『呉新聞』昭和19年7月13日、「彩管報国に燃ゆる作品 海軍勇士に贈る献納画展盛況」『呉新聞』昭和19年7月16日
- 149「鎌田訓導の陣中だより 岩方校で「先生万歳」」『呉新聞』昭和13年7月9日、「鎌田氏の戦線風景が異彩を放つ」『呉新聞』昭和13年11月15日
- 150「陣中画信 島山部隊 小坂秀雄」『呉新聞』昭和14年7月22日
- 151「老画伯の彩管報国 きょう一万枚色紙揮毫会 和田陵雨氏」『呉新聞』昭和14年10月1日
- 152「征こう七洋へ 海軍志願兵募集ポスター 呉海洋美術協会 藤川九郎氏」『呉新聞』昭和17年9月19日、「征こう七洋へ 海軍志願兵募集ポスター 呉海洋美術協会 村上静一氏」『呉新聞』昭和17年9月22日
- 153「井関三郎(潤徳女子高等学校美術科教諭)「長田国夫・その人と作品」『長田国夫作品集』(長田国夫作品集刊行委員会/平成8年8月)p52
- 154「小川真理生「広報」は戦前に始まる」『2007年度広報史研究会報告書 日本の広報・PR史研究』(日本広報学会広報史研究会/2008年6月)p19
- 155「軍神上田兵曹長の生涯を絵で残す 郷画伯が資料収集中」『呉新聞』昭和18年8月14日
- 156「呉ボベニエ会洋画展覧会を観る 呉銀行三階楼上で」『呉新聞』昭和4年10月6日
- 157「長田健雄「第三回互歩会洋画展と山下画伯」『呉新聞』昭和9年10月31日
- 158「水船三洋「ボベニエ会画評」(上)(中)(下)」『芸備日日新聞』昭和5年10月19日、20日、21日
- 159「軍港呉画壇を飾る第7回独立美術展 27日から本社楼上で開く」『呉新聞』昭和17年4月27日、「非常に盛会 独立美術洋画展」春の軍都 呉を飾る 洋画展開催 中国本社支社楼上で毎日盛況」『呉新聞』昭和17年4月28日
- 160「二級美展入選の絵画 その総数九百余点 代表的優秀の作品」『呉新聞』昭和5年5月25日、「絵画啓発のため 教員展を開く 呉市内の関係者が二月下旬作品を発表」『呉新聞』昭和7年1月31日
- 161「市立高女生徒金牌を受賞 全国高等女学校の図画展覧会において」『呉新聞』昭和4年11月23日
- 162「独立展に二点も入選 呉東本通校訓導〇字根元警氏」『呉新聞』昭和6年1月13日
- 163「兄弟善を並べ! 独美展は連続入選 鎌田訓導一家の喜び」『呉新聞』昭和11年4月25日
- 164「鎌田知治「美と子供と魂」『教育研究収録』第4巻(昭和4年/呉市)/76-77ページ
- 165「帝展日本画部の入選作「閑静」呉出身の青年画家 片岡京二氏の進境」『呉新聞』昭和7年11月6日
- 166「田辺至 編「米寿記念 藤川九郎 作品集」(1988年)
- 167「令和3年度版 呉市統計書/人口」呉市ホームページ、ウィキペディア「日本の市の人口順位」「都道府県庁と政令指定都市の人口順位」
- 168「出品3点が入選 日本版画展に朝井清氏」『呉新聞』昭和18年6月24日
- 169「秋の洋画壇を飾る洋画新作展 10.11の両日 呉支社楼上で開催」『呉新聞』昭和15年11月1日
- 170「藤田嗣治画伯の再来」『呉新聞』昭和11年6月3日、「『軍港の品格も呉は世界一』藤田画伯夫妻が賞讃 歓迎会と氣に満つ」『呉新聞』昭和11年6月4日、「藤田画伯の本通の夜景 呉の宣伝絵葉書一万印刷」『呉新聞』昭和12年2月5日
- 171「呉市制100周年記念版 呉の歩み」(平成14年3月25日、呉市史編纂室編、呉市役所発行)p238-239
- 172「古谷可由(ひろしま美術館)「南薫造・永瀬義郎、疎開時代の活動研究〜疎開が残した中央画壇の地方への影響〜」『鹿島美術研究(年報第15号別冊)』(1998年11月15日、鹿島美術財団)
- 173「中野正英「南薫造先生と芸南文化同人会(1)」『安芸津風土記』第13号(昭和48年11月1日/安芸津記念病院郷土資料室)p5
- 174「編集後記」『芸南文化第一巻第一号』(昭和21年8月25日/芸南文化同人会本部)p39
- 175「永瀬義郎「巻頭言」『季刊 芸南文化 第1巻第1号』(1946年8月25日、芸南文化同人会本部)p3
- 176「中野正英「地方文化」前掲書p4-5
- 177「中村郁夫「仮面と芸南文化 ムッシュ・ナガセ」前掲書p34-35
- 178「芸南文化録音」前掲書p24
- 179「芸南文化録音」『季刊 芸南文化 第1巻第2号』(1946年12月25日/芸南文化同人会)p36
- 180「中野正英「南薫造先生と芸南文化同人会(2)」『安芸津風土記』第14号(昭和49年2月1日/安芸津記念病院郷土資料室)p3
- 181「前掲書p1
- 182「古谷可由「南薫造・永瀬義郎、疎開時代の活動研究〜疎開が残した中央画壇の地方への影響〜」『鹿島美術研究(年報第15号別冊)』(1998年11月15日/鹿島美術財団)p250
- 183「倉橋清方「呉美術協会の発足の大王〜昭和戦前期の呉美術」『呉美術協会創立60周年記念誌 美術くれ』(呉美術協会/平成18年3月)p8-9 所載
- 184「倉橋清方「呉美術協会の発足の大王〜昭和戦前期の呉美術」『呉美術協会創立60周年記念誌 美術くれ』(呉美術協会/平成18年3月)p8-9
- 185「千田武志「呉市美術界の特徴と呉美術協会の設立」『呉美術協会50周年記念誌 美術くれ』(呉美術協会/平成8年)p8
- 186「呉市史 第七巻」(呉市史編纂委員会/呉市役所/平成5年)p560
- 187「呉市史 第七巻」(呉市史編纂委員会/呉市役所/平成5年)p563-565